『かながき論語』本文と索引

――本文編――

片山晴賢
木村晟

はじめに

室町時代中期の成立にかかる『かながき論語』（三冊、大槻文彦博士の旧蔵）は、伝統的な漢文訓読法の中に室町期的な要素の多く混入した好資料である。本書の現存本は三冊の中の二冊が室町中期の書写、他の一冊は江戸期に入ってからの転写本であるとされてゐる。夙く川瀬一馬博士によって『安田文庫叢刊　第一篇』（昭和10年9月発行）として翻字・刊行されてゐて利用の便が存するものである。

内容は『論語』の首尾を欠いてゐて、次のやうな構成になってゐる。第一冊は、雍也第六第二四章より述而第七・泰伯第八および子罕第九第五章まで。第二冊は、郷党第一〇第八章より同篇の終章まで、季氏第一六第一章の半ばより同章の終りまで（第三冊の転写本と重複）、子路第一三の最初から第九章半ばまで（第三冊の転写本と重複）、衛霊公第一五第五章より第一二章まで（第三冊の転写本と重複）。第三冊は先進第一一より陽貨第一七第七章までとな

ってゐる。

本書の国語研究資料としての価値は、博士家などの伝統的な『論語』の訓読法を踏襲しつつも、表記の上で室町時代の特徴を遺憾なく表出してをり、仮名遣ひ・音韻等の方面の誠に有用な資料となる点にある。吾人はこの点に着目して本書の総索引を編輯すべく企てた。先づ川瀬博士の前記翻字本を底本として「本文篇」を作成し、それに基づいて「索引篇」をば編むこととした次第である。ただしこの「索引篇」は本誌の紙幅の関係で次号以降に分載せざるをえない。この点特にご寛恕を乞ふ。

最後に本稿を成すに当って特に学恩を蒙った本書研究の先覚者川瀬一馬博士に深甚なる謝意を表するものである。

目次

雍也　第六……1
六—24……73　六—25……73　六—26……73　六—27……73　六—28……74
述而　第七……2
七—1……74　七—2……74　七—3……74　七—4……74　七—5……74
七—6……75　七—7……75　七—8……75　七—9……75　七—10……75
七—11……76　七—12……76　七—13……76　七—14……76　七—16……76

七—17……77　七—18……77
七—22……77　七—23……77
七—27……78　七—28……78
七—32……79　七—33……79
七—37……80　七—34……79
七—36……80　七—35……80

泰伯　第八……80

八—1……80　八—2……80
八—6……81　八—7……82
八—11……82　八—12……82
八—16……83　八—17……83
八—21……84　八—18……83
八—20……83　八—19……83

子罕　第九……84

九—1……84　九—2……84
九—3……84　九—4……85
九—5……85

郷党　第一〇……85

一〇—8……85　一〇—9……86
一〇—10……86　一〇—11……86
一〇—12……86　一〇—13……86
一〇—14……86　一〇—15……87
一〇—16……87　一〇—17……87
一〇—18……87

先進　第一一……87
一一―1……88　一一―2……88　一一―3……88　一一―4……88　一一―5……88
一一―6……88　一一―7……88　一一―8……89　一一―9……89　一一―10……89
一一―11……89　一一―12……90　一一―13……90　一一―14……90　一一―15……90
一一―16……91　一一―17……91　一一―18……91　一一―19……91　一一―20……91
一一―21……92　一一―22……92　一一―23……92

顔淵　第一二……94
一二―1……94　一二―2……94　一二―3……95　一二―4……95　一二―5……95
一二―6……95　一二―7……96　一二―8……96　一二―9……96　一二―10……97
一二―11……97　一二―12……97　一二―13……97　一二―14……97　一二―15……98
一二―16……98　一二―17……98　一二―18……98　一二―19……98　一二―20……99
一二―21……99　一二―22……100　一二―23……100

子路　第一三……100
一三―1……100　一三―2……100　一三―3……101　一三―4……101　一三―5……102
一三―6……102　一三―7……102　一三―8……102　一三―9……103　一三―10……103
一三―11……103　一三―12……103　一三―13……103　一三―14……103　一三―15……104
一三―16……104　一三―17……104　一三―18……105　一三―19……105　一三―20……105

憲問第一四……107

一三—21……106　一三—22……106　一三—23……106　一三—24……106　一三—25……106
一三—26……107　一三—27……107　一三—28……107　一三—29……107　一三—30……107
一四—1……107　一四—2……107　一四—3……108　一四—4……108　一四—5……108
一四—6……108　一四—7……108　一四—8……108　一四—9……108　一四—10……109
一四—11……109　一四—12……109　一四—13……109　一四—14……109　一四—15……110
一四—16……110　一四—17……110　一四—18……110　一四—19……111　一四—20……111
一四—21……111　一四—22……111　一四—23……112　一四—24……112　一四—25……112
一四—26……112　一四—27……112　一四—28……112　一四—29……112　一四—30……113
一四—31……113　一四—32……113　一四—33……113　一四—34……113　一四—35……113
一四—36……113　一四—37……113　一四—38……114　一四—39……114　一四—40……114
一四—41……114　一四—42……114　一四—43……115　一四—44……115　一四—45……115
一四—46……115　一四—47……116

衛霊第一五……116

一五—1……116　一五—2……116　一五—3……117　一五—4……117　一五—5……117
一五—6……117　一五—7……117　一五—8……118　一五—9……118　一五—10……118
一五—11……118　一五—12……118　一五—13……118　一五—14……119　一五—15……119

一五―16……119　一五―17……119　一五―18……119　一五―19……119　一五―20……119
一五―21……119　一五―22……119　一五―23……119　一五―24……120　一五―25……120
一五―26……120　一五―27……120　一五―28……120　一五―29……120　一五―30……120
一五―31……121　一五―32……121　一五―33……121　一五―34……121　一五―35……121
一五―36……121　一五―37……122　一五―38……122　一五―39……122　一五―40……122
一五―41……122

季氏第一六……122

一六―1……122　一六―2……124　一六―3……124　一六―4……124　一六―5……125
一六―6……125　一六―7……125　一六―8……125　一六―9……125　一六―10……126
一六―11……126　一六―12……126　一六―13……126　一六―14……127

陽貨第一七……127

一七―1……127　一七―2……128　一七―3……128　一七―4……128　一七―5……128
一七―6……129　一七―7……129

雍也第(ろく)
ようや　てい六

六―24 [い]はく　仁者雖告之曰(は)　「じんしやにたとひつげていわく　『井(せい)にじんしやあり』といはゞ　其従之(が)也　子しの
曰　ゝたふまく　何為其然也　君子逝可也　陷おちらしむべし　「なんすれぞそれしからん　くんしはゆかしむべし　陷おちらしむべからず　欺あざむくべし　罔し
可(ふ)也　うべからず」

六―25 子曰　しの〻たふまく　君子博文学　「くんしはひろくぶんをまなんで　約之やくするにれいをもつてす　以　亦(マタ)以　畔　弗可
矣夫　し」　又もつてそむかざるべ

六―26 子南子(み)　なんしを見る　子路説　しろよろこびず　夫子矢之曰　ふうしちかつてのたふまく　「予　否　所　者(てん)厭　ふ
之　さがん〳〵(てんふさがん)」　すまじきところをせば　天

六―27 子曰　しの〻たふまく　「中庸(ちうよう)の徳為(こと)　それいたれるかな　其至　民鮮(い)(こと)(ひさ)　たみすくなひ　事久し」

六―28 子貢曰(ぼ)　しこうがいわく　「如能博民施　もしよくひろくたみにほどこして　能衆済　よくしうをすくはゞ　何如　いかん　仁謂可　じんといふべしや」

子曰　しのゝたふまく　「なんぞじんをしも　事ことゝせん　必かならずせいか　聖乎　堯げう・舜しゆんも　其それなをやめり　猶病諸
夫仁者　それじんしやは　己をのれたゝんとほつして　立欲　人をたつす　達　己をのれたつせんとほつして　欲達　人をたつす　能よくち　近
譬取仁方謂可也　かくたとへをとる　じんのみちといふべからくのみ

述而第七　じゆつじてい七

七―1　子曰　しのゝたふまく　「述のへてさくせず　作　信しんしていにしへをこのむ　古　好　竊ひそかに　我われをらうはうにひす」　老彭比

七―2　子曰　しのゝたふまく　「黙もだしてしる　識　学まなんでいとはず　厭　誨人をおしへてうまず　倦　何なんぞわれにあるや」　我有哉

七―3　子曰　しのゝたふまく　「徳とくをおさめず　修　学がくをかうぜず　講　義きをきいてしたがふ事　聞従　能あたはず　善よからざるをあ　改
らたむる事　能あたはず　是これ　我わがうれへなり」　憂

七―4　子燕居　しのゑんきよせるときに　申々しん〳〵如じよたり　夭々よう〳〵如じよたり

七―5　子曰　しのゝたふまく　「甚はなはだし矣ひかな　吾わがをとろへたる事也久しいかな　衰　矣　吾復わが又ゆめに　夢　周しうこうを見ざ　公

也(こと)
る事」

七―6 子曰 しのゝたふまく 「道志(が)ひ みちをねかひ 徳拠 とくにより 仁依 じんにより 芸遊 げいにあそぶ」

七―7 子曰 しのゝたふまく 「自束脩以(じ)上 みづからそくしういしやうを 行 おこなつつるときんは(ば) 吾未嘗 われいまだむかしより 誨(ふ)をしう
る事(こと)無なくんばあらず焉」

七―8 子曰 しのゝたふまく 「憤 ふんせずんばけいせず 啓 悱 ひせずんばはつせず 発 一 ひとつのすみをあげてしめすに 挙 隅 すみをもつてはんせずんば 示 三 みつの
隅 以 反 すなはちわれまたせず 則 吾復 」

七―9 子 喪有(ひと)側 もある人のかたはらに 食 しよくしつるときんば 未嘗 いまだむかしより 飽 あくまでにせず 也 子 し 是(このひ) 此日にして
哭 こくしつるときんば 則 すなはちうたうたはず 歌

七―10 子顔淵謂曰 し がんねんにかたつてのたふまく 「用 もちゐるときんば 則 すなはちおこなふ 行 舎 すつるときんば 則 すなはち
蔵 かくる 唯 たゞ 我与爾 われとなんぢと 是有夫 これあるかな」 子路曰(は) しろがいわく 「し 三(さんぐ)軍 行 三くんをおこなはんときんば 則 すな
誰 はちたれとともにかせん」 子曰 しのゝたふまく 「暴虎(ひよ)馮(が)河 死 ほうこへうかしてしぬとも 悔(い)無 くゐなからんものには 者 吾 われ
与 はくみせじ 必 かならず事(こと)に臨のぞんでおそり 懼 謀 はかり事(こと)を好 このんで成 なさん者(ものなり) 物也」

七―11　子曰　しのゝたふまく　「富而求可　とみしかももとめつへくんば　執鞭士雖　しつへんのしといふとも　吾亦為如求　われまたせん　もしもとむ
べからずんば　吾好所　わがこのむところにしたがはん」　者　所　従

七―12　子慎所斉戦疾　しのつゝしむところはさい・せん・しつ

七―13　子斉在韶楽聞　せいにましてせうがくをきいて　三月肉味知　三げつしゝのあぢはいをしらず　曰図楽　のたふまく　「はからざりき　が
くをおこす事の　斯至事　こゝにいたんなんといふことを」　為　こと

七―14　冉有曰　ぜんゆうがいはく　「夫子衛君為乎　ふうし　ゑいのきみをたすけんや」　子貢曰　しこうがいわく　「諾吾将問　だく　われまさにとはん
とす」　入曰　いつていわく　「伯夷叔斉何人也　はくい・しくせいは　なんびとぞ」　子曰　しのゝたふまく　「古賢人也　いにしへのけんじんなり
」　曰　いわく　「怨乎　うらみありきや」　曰　のたふまく　「じんをもとめて　仁得　じんをえたり　何怨　なんのうらみかあら
んや」　出曰　いでゝいはく　「夫子為　ふうしはたすけず」

七―15　子曰　しのゝたふまく　「蔬食飯　そしをくらい　水飲　をのみ　肱曲　ひじをまげて枕にして　楽亦其中在矣　たのしむ事　又そのなかにあり
不義富且貴　ふぎにしてとみ　又たつときは　我於浮　われにおゐてうかめる雲如　のごとし」

七―16　子曰　しのゝたふまく　「我数年加以易学大過　われにすうねんをくはへて　五十にしてもつてゑきをまなびば　以　もつて　大　おほゐなるあや

まちなかるべし」
無　可矣

七―17　しのまさしくいふところは　ししよ・しつれいをみなまさしくいふ
子雅言所　詩書執礼皆雅言

七―18　せうこう　こうしをしろにとふ　しろこたへず　しのゝたふまく　「なんぢなんぞいはざつつる　それ人
葉公孔子子路問　子路対　子曰　女奚曰　其人

となり　いきどをりをおこし　しよくをわする　たのしみこれをもつてうれへをわすれたる　おひのまさにいたんなんとする事をしらず　としかいふならん」
為也憤発食忘楽以憂忘老将至爾云知

七―19　しのゝたふまく　「われむまれながらにしてしれるものにはあらず　いにしへをこのんで　びんにしてもとめたるものなり」
子曰　我生知者非古好敏求者也

七―20　しくわい・りよく・らん・しん　かたらず
子怪力乱神語

七―21　しのゝたふまく　「われ三じんおこなつつるときんは　かならずわがしをうそのよきものをゑらんでしたがふ　そのよからざるものをば　しかもあらたむ」
子曰　我三人行必我師得其善者択従其善者而改

七―22　しのゝたふまく　「天とくをわれになせり　くわんたい　それわれをいかんがせん」
子曰　天徳予生桓魋其如何

七―23　しのゝたふまく　「じさんし　われをもつて　しにかくせりとするか　われなんだちにかくす事なし　われ
子曰　二三子我以子隠為乎吾爾隠無吾

行
おこなふとして　二三子与
じさんしとともにせず　といふ事なきは　是丘者無
これきう也」

七―24
子四以教文行忠信
し　よつをもつておこなふ　ぶん・かう・ちう・しん

七―25
子曰
しのゝたふまく　「せい人をば　吾得聖
われえて見ずなんぬ　矣
たふまく　「せんじんをば　吾得善人
われえて見ずなんぬ　矣
見る事えては　君子得
くんしをだも　斯可矣
これか也」　子曰
しのゝ
見る事えては　つねある人をだも　斯可矣
これか也　亡而
なけれど
もありとす　為虚而盈為約
むなしけれどもみてりとす　せばしけれともゆたかなりとす　為難乎有恒矣
かたいかな　つねある事」

七―26
子釣而綱宿射
し　てうすれどもかうせず　よくすれどもねとりをゐず

七―27
子曰
しのゝたふまく　「けだしあらん　知蓋有作者
しらずしてさくするもの　我是無也
われこれなし　多聞
おほくきいて　其善者
そのよきもの
択而従多識次
をえらんで　したがふおほく見てしるは　知
しるがつぎ也」

七―28
互郷与言難
こきやうともにいふ事かたし　童子見
とうし　まみゆ　門人惑
もんじん　まどひぬ　子曰
しのゝたふまく　「そのすゝまんに
進其潔
すゝまば　そのいさぎよきには　与也
くみせん　其往
そのいんじをば　保也
やすんぜじ」
与退
はくみません　其退
そのしりぞかんには　与也
くみせじ　唯何甚
たゞなんぞはなはだしき　人己潔
人をのれをいさぎよふして　以
もつて

七―29
子曰
しのゝたふまく　「じんとをかれや　仁遠乎哉
われじんをほつすれば　我仁欲
こゝにしんいたる」　斯仁至矣

七―30 陳司敗問ちんしはいとはく「昭公せうこう礼知れいをしれりや乎」孔子対こうしこたへてのたふまく「礼知れいをしれり」孔子退しりぞきぬ巫馬期揖ぶばきをいつして進すゝんでいわく曰「吾聞われきく君子くんしは党たうせず君呉きみごに娶めとれり同姓とうせいなるがために為ごまうしといふ呉孟子君きみしかもれいを知しらば礼たれかれいを知しらざらん」巫馬期ぶばき以もつてまうす告子しのゝたふまく曰「丘也きう幸さいはへあり苟いやしくも過あやまちあるときんば有人ひとかならず必しる

七―31 子しと人と与うたうたふ歌時ときにして而よきときんば善かならずかへさしめて必反のちにくわす使後和

七―32 子しのゝたふまく曰「文莫ぶんばくなる事ことわれなを吾人のごとし猶ほひとみにくんしをおこなふときんば躬君子行すなはちわれ吾未だ得れいまたうる事ことあらず有

七―33 子しのゝたふまく曰「若もしせへとじんとには聖仁すなはちわれあにあえんや与抑そも〳〵まなんでいとはず為厭人ひとおしへてうまず倦則すなはちしかいふといふべからくのみ」爾云可巳公西華こうせいくわがいはく曰「まさし正なふ事あたはず」能

七―34 子しのやまひへいなり疾病子路禱しろいのらんとこふ請子しのゝたふまく曰「ありや」有諸子路対しろこたへていわく曰「あり」有誄るいにいはく曰「しやうかしんきにたうじすといへり」上下神祇禱爾子しのゝたふまく曰「丘きうがいのる事久し」禱矣

七―35　子曰　しのゝたふまく　奢則不遜　「おごりはすなはちふそんなり　儉則固　けんはすなはちいやし　其不遜与　そのふそんなるよりは　寧固　むしろいやしかれ」

七―36　子曰　しのゝたふまく　君子坦蕩々　「くんしは　たんたう〳〵たり　小人長戚々　小じんは　ちやうせき〳〵たり

七―37　子温而厲　し　おんにしてはげし　威而猛　いあつてたけからず　恭而安　けうにしてやすし

泰伯　第八

八―1　子曰　しのゝたふまく　泰伯其至德　「たいはくをば　それしとくといふべし　謂可已矣　からくのみ　三度下以讓民得　みたび　天　かをもつてゆづる　たみえ　而称無焉　てせうずる事なし」

八―2　子曰　しのゝたふまく　恭而礼無　「けうにしてれいなきときんば　勇而礼無　ようにしてれいなきときんば　慎而礼無　つゝしんでれいなきときんば　則勞　すなはちらうす　則乱　すなはちらんす　則絞　すなはちかうす　直而礼無　ちよくにしてれいなきときんば　葸　ちしす　君子親篤　くんし　しんにあつきときんば　則民興　すなはちたみじんをおこす　故旧遺　こきうわすれさるときんば　則民偷　すなはちたみいや

しからず

八―3 曾子疾有　門弟子召曰　「予足啓　予手啓　詩云　『戦々兢々　深淵臨　如薄氷履　而後吾免れまぬかんぬといふ事を知しんぬ　小子せうし』」

八―4 曾子疾有　孟敬子問　曾子言曰　「鳥之将死　其鳴也哀　人之将死　其言也善　君子之貴　所道者三　容貌動　斯暴慢遠矣　顔色正　斯信近矣　辞気出　斯鄙倍遠矣　籩豆之事　則有司存」

八―5 曾子曰　「能以不能問　多以寡問　有無若虛　実若虛　犯而校　昔者吾友嘗事斯従矣」

八―6 曾子曰　「以百里之命寄可　大節臨而奪　君子与　君子也」

『かながき論語』本文と索引（片山）（木村）

八―7　曾子曰（は）そうしがいわく　「士以弘毅　不可任重（お）而道遠（ほ）　仁以
し　もつてこうぎならずんばあるべからずじんをもふして　みちとをし　じんこれをも
つて　任重（う）而道遠（ほ）　仁以
をのんがじんとす　為己（お）　亦（また）重（お）乎　死而後已　亦（また）遠（ほ）乎
又をもからずや　しんでのちにやむ　又とをからずや」

八―8　子曰
しのゝたふまく　「詩興　礼立　楽成
しにおこり　れいにたち　がくになる」

八―9　子曰
しのゝたふまく　「民由　使可　知使可
たみにはもちゐしむべし　しらしむべからず」

八―10　子曰
しのゝたふまく　「勇好貧　疾乱
ようをこのんでまづしきをにくむは　らんなり　人（ひと）而仁疾
人としてじんあらざるをにくむ事（こと）　すでにはなはだしきは　甚乱
らん也（なり）」

八―11　子曰
しのゝたふまく　「如周公之才之美有　使驕且（また）悋
もし　しうこうのさいのびありとも　たとひおごり　又やぶさかならば　其余
そのよは見（み）
観足也已矣
るにたらざらくのみ」

八―12　子曰
しのゝたふまく　「三（さん）年学　穀至　得易
三ねんまなんで　よきにいたらざるときんばうべからざくのみ」
也已

八―13　子曰
しのゝたふまく　「信篤　学好　死善（ぜ）道守　危邦入　乱邦
しんにあつうして　がくをこのむ　しをせんたう（だ）にまぼる　きはうにはいらず　らんは
うにはおらず（を）居　天（てん）下道有　則見　道無　則隱　邦道有
天かみちあるときんば　すなはちまみゆ　みちなきときんば　すなはちかくる　くにみちある
ときに　貧且賤焉　耻
まづしくまた　いやしきは　はぢ也（なり）　邦道無　富且貴焉
くにみちなきときに　とみ　また　たつときは　耻
はぢ也（なり）」

八―14 子曰 しのゝたふまく
「其位在 そのくらゐにあらずんば 其政謀也 そのまつりことをはからず」

八―15 子曰 しのゝたふまく
「師摯之関雎之乱 しゝがくわんしよのらんを 始 はじむるときに 洋々乎 やう〳〵ことして 耳盈哉 みゝにみてるかな」

八―16 子曰 しのゝたふまく
「狂而直 きやうにしてちよくならず 侗而愿 とうにしてげんならず 悾々而信 こう〳〵としてしんあらずんば 吾不知之矣 われしらず」

八―17 子曰 しのゝたふまく
「学如及 かくもしをよぶべからずんば 猶失之 なをうしなてんことをおそるゝがごとくす」

八―18 子曰 しのゝたふまく
「巍々乎 ぎゞたるかな 舜禹之 しゆんうの天下をたもてる事 而 しかうして 与 あづからず 焉」

八―19 子曰 しのゝたふまく
「大哉 おほいなるかな 堯之君為也 ぎようのきみたる事 巍々乎 ぎゞたるかな 唯天為大 たゞ天をおほいなりとす 唯 たゞ 堯則之 ぎようのつとる 蕩々乎 たう〳〵たるかな 民能名 たみよくなづくることなき事 無焉 無 焉 巍々乎 ぎゞたるかな 其成功有也 それせいこうある事 煥 はんたるかな 其文章有 それぶんしやうある事」

八―20 舜 しゆん 臣 しん五じんあり 人 じん有 しかうして 而 天下おさまる 治 武王 ぶわうのゝたふまく 曰 「予 われ 乱 らん 臣 「しん」 十 じ人有 しうじんあり」 孔子曰 こうしのゝたふまく 「才難 さいのかたいこと 其然 それしからずや 乎 唐虞之際 たうぐのあひだに 於斯盛 こゝにさかん 為 なりとす 婦人有焉 ふじんあり 九人而已 きうじんのみ也 天下三分 天かを三ぶんして 其二 そのふたつをたもつて 有 以 もつてゐんにふくしす 殷服事 ゐんにふくしす

周　徳　其　至徳　謂　可　也已矣
しうのとくをば　それしとくといふべからくのみ」

八―21
子　曰　禹　吾　間　然　飲　食　菲　而　孝　鬼　神　致
しのゝたふまく　「うをは　われかんぜんする事なし　いんしよくをうすうして　かうをきしんにいたす
衣　服　悪　而　美　黻　冕　致　宮　室　力　溝　洫　尽　禹
いふくをあしうして　びをふつへんにいたす　きうしつをいやしうして　ちからをこういきにつくす　うをば
吾　間　然　無　矣
われかんぜんする事なし」

子罕　第九

九―1
子　罕　利　言　命　与　仁　与
し　まれにりとき　めいゆるし　じんゆるす

九―2
達　巷　党　曰　大　哉　孔　子　博　学　名　成　所　無　子　聞　之
たつかうたうの人のいわく　「おほいなるかな　こうしのひろくまなんで　なをなすところなきこと　しきいて
門　弟　子　謂　曰　執　乎　射　乎　吾　何　執
もんていしにかたつてのたふまく　「われなにをかとれる　ぎよをとれるか　しやをとれる　われはぎ
御　執　矣
よをとれり」

九―3
子　曰　麻　冕　礼　今　也　純　儉　吾　衆　従　下　拜
しのゝたふまく　「ばべんはれいなり　いまいとはけんなり　われはしうにしたがはん　しもにはいする

は　礼　れいなり　今　いまかみには　上　いする　拝　は　泰　たいなり　衆　しうにたが　違　へりといへども　雖　われはしもにしたがはん　吾　下　従

九―4　子　し　四　よつをたつ　絶　こゝろとすることなし　意　必　かならず　毋　とする事なし　固　かたしとする事なし　毋　われとするなし　我　毋

九―5　子　し　匡　きやうにをそる　畏　のたふまく　曰　「ぶんわうすでにぼつしたれども　文王既没　ぶんこゝにあらざれや　文　天之将　天まさに　斯文　このぶんを　喪　ほろぼさんとせましかば　後死者　こうしのもの　斯文　このぶんにあづかる事　与　えざらまし　不得　天之未　いまだこの　文喪　ぶんをほろぼさざるに　也　匡　きやう人　其　それわれを　予　〔以下欠落〕

郷党　きやうとう　第十　てい

一〇―8　肉多　しゝおほしといへども　雖　しよくのきにかたしめず　食　たゞさけははかりなけれども　気勝使　酒　唯　酒量　無　らんにをよぼさず　乱　うる　及　酒市　さけ・いちのほじゝくらはず　脯食　はじかみをすてずしてくらふ　薑撤食　おほくくらはず　多食　こうにまつるときんば　公祭　しゝ　肉　宿　よべにせず　祭　まつりのしゝは　肉　三日　三じつをいださず　出　三日　三じつにいでぬるをばくらはず　出　食　しよくするときに　食矣　物　語　がたりせず　寝　いぬるときにものいはず　言　そしさいかうくわといへども　蔬食菜羹瓜　雖　さいするときんば　祭　かならずさいじよ　必　斎　如

也
たり

一〇―9 席 正 せきたゞしからずんはをらず 坐

一〇―10 郷 飲 酒 きやう人のいんじゆに 杖 者 出 じやうしやいでぬるときに 斯 出矣 こゝにいづ 郷 きやう人のをにやらふときに 儺 朝 服 てうふく
而 昨階 立 して そかいにたてり

一〇―11 人 他 邦 問 人をたはうにとふときに 再 拝 さいはいしてをくる 送之 康子 かうし 薬 くすりををくれり 饋 拝 受之 はいしてうく 曰 のたふまく
丘 未 達 「きういまたつせずといつて 敢 嘗 あへてなめず

一〇―12 厩 焚 むまややけたり 子 朝 し てうよりしりぞひて 退 曰 のたふまく 傷 乎 「人をやふれりやといつて 馬 問 むまをとはす」

一〇―13 君 食 賜 きみ しよくたまふときんば 必 席 正 かならずせきたゞしうして 先 嘗 君 まづなむ きみ 腥 賜 なまぐさきをたまふときんば
必 熟 而 薦之 かならずじゆくしてすゝむ 君 生 賜 きみ いけるをたまふときんば 必 畜 かならずかふ 食 しよくに 於君侍 きみにはんべると
祭 きに 君さいするときんば 先 飯 まづはんす 疾 やまいするときに 視 君 きみ見るときんば 東 首 とうしゆして 朝 服 てうふくを
加 紳 挽 君 命 召 駕 俟 行矣 くはへて しんをひく きみ めいじてめすときんば かをまたずしてゆく

一〇―14 太廟 入 事 毎 問 太べうにいつて ことごとにとふ

一〇—15 朋友死 帰 所 無 曰 我 於 殯 朋友 饋
ほうゆうしんでよらんところなし のたふまく 「われにおゐてひんせよ ほうゆうしんのをくりものは

車馬 雖 肉 非 拝
しやばといへども まつりのしゝにあらざれば はいせす」

一〇—16 寝 戸 居 容 子 齊 衰 者 狎 雖 必
いぬる時にしせず をるときかたちつくらず し しさいのものを見ては なれたりといへども かならず

変 晃 者 瞽者 与 褻 雖 貌 以 凶 服 者
へんず べんしやとこしやとを見ては なれたりといへども かならずかたちをもつてす けうふくのものに

式之 負版 者 式 盛 饌 有 必 色 変 而作 迅 雷
しよくす ふはんのものにしよくす せいせんあるときんば かならずいろをへんじてたつ とくいかづちな

風 烈 必 変
り かせふいて れつたるときんば かならずへんず

一〇—17 車 升 必 正 立 綏 執 中 内 顧 疾
くるまにのるときに かならずたゞしくたつて すいをとる 車のうちにして しりへにかへりみず とく

言 親 指
ものいはず みづからゆびさゝず

一〇—18 色 斯 挙 矣 翔 而 後 集 曰
いろのまゝに これきよす ふるまつて のちにゐる のたふまく

山梁 雌雉 時 哉
「さんりやうのしち ときあるかな

時 哉 子路 供之
ときあるかな しろ きようす

嗅 而 作
三たびかひで たつ

先進 第十
せんしん ていしゆう

二一―1
子曰　しのゝたふまく
「先礼楽進　まつれいがくにすゝむは　野人也　やしんなり　後礼楽進　のちにれいがくにすゝむは　君子也　くんしなり　如用之　もちゐるは　則吾先進　すなはち我はせんしんにしたがはん」

二一―2
子曰　しのゝたふまく
「我陳蔡従者　われにちん・さいにしたがへし物は　皆門及者也　みなかとにしも　およはざる物なり」
「徳行　とつかうには　顔淵閔子騫冉伯牛仲弓　かんねん・ひんしけん・せんはくきう・中きう　言語宰我子貢政事冉有せんに　けんきよには　さいか・しこう　せいしには
季路文学子游子夏　う・きろ　ふんかくには　しゆう・しか」

二一―3
子曰　しのゝたふまく
「回也　くわい　我助者非吾言於説　われをます人にあらす　わか事にをひて　よろこひすといふ所なし」

二一―4
子曰　しのゝたふまく
「孝哉　かうあるかな　閔子騫　ひんしけん　其父母昆弟間　人その　ふほこんていの事をへたてす」

二一―5
南容　なんにより
三白圭復　三たひはくけいをかへさう　孔子其兄之子以妻之　こうし　そのこのかみのこをもつて　めやわす

二一―6
季康子問　きかうしとはく
「弟子孰好学　ていし　たれかかくこのむことをする」　孔子曰　こうしこたへてのたふまく
「顔回　かんくわいと
有者　いふ物ありき　学好　かくをこのむ　怒遷　いかりをうつさす　貳過　二たひあやまちせす　不幸短命死矣今　ふかうたんめいにして　しにき　い
也則亡未聞好学好者　まはすなはちなし　いまたきかす　かくこのむ物を」

二一―7
顔淵死　かんねんしぬ
顔路子之車請　かんろ　しのくるまをこふ
子曰　しのゝたふまく
「才不亦各　さいあるも　才あらさるも　亦又をの〳〵

其　言　鯉死　棺　有　槨　無　吾徒行行　以　槨　為
その子をゆふ　りしぬるときに　くわんあつてくわくなし　われかちよりゆいて　もつてくわくをつくらす

吾　夫之後　従　以　徒　可　也
わか　大　ふのしりゑにしたかへるをもつて　われもつてかちより　行へからす

二―8　顔淵死　子曰　憶　天予喪　天予喪　天予喪
かんねんしぬ　しのゝたふまく　「いゝ　てんわれをほろほしつ　てんわれをほろほし　てんわれをほろほしつ

二―9　顔淵死　子　哭之　慟　従者曰　子慟矣　子曰　慟
かんねんしぬ　し　こくしてとうす　せうしやのいはく　「しとうす」　しのゝたふまく　「とうすること

有　乎　夫　為　非　而　誰　為
あつつるか　かの人のために　とうするにあらすして　たれかためにかせん」

二―10　顔淵死　門人厚　葬之　欲　子曰　不可　門人厚
かんねんしぬ　もんしんあつくはうむらまくほつす　しのゝたふまく　「ふかなり」　もんしん　あつくほ

葬之　子曰　回也　予視　猶父　也　予視猶子
うむる　しのゝたふまく　「くわい　われをみる事　なをちゝのことくす　我みる事なをこのことくする事

得　也　我　非　夫二三子也
をゑす　われにはあらす　かのしさつしならん」

二―11　季路　鬼神事　子曰　未　事　能
きろ　きしんにつかへんことを　とふ　しのゝたふまく　「いまた人につかふる事あたはす　焉　能
鬼事　敢死問　曰　未生知　焉死知
くきにつかゑん」　いわく　「あへてしをとふ」　のたふまく　「いまたせいをしらす　いつくんそしをしら
ん」

一一―12 閔子騫 側 かたわらに侍り 誾々如 ぎん〳〵しよたり 子路 行々如 かう〳〵しよたり 冉子 子貢 侃々如 かん〳〵しよたり 子路 しろ せんし・しこう

如 子 楽 したのしむ 由 ゆふがこときむは 若 そのしせんをゑし 其 死然得 ろ人 魯 ちやうふをつくる 長 ひとびと 府為 ひんしけんかいわく 閔子騫曰 「きうくわんによらは 旧貫 仍 いかん 如之何 なんそかならすしもあらためつくらん 何必 改作 しのゝたふまく 子曰 「かの人はいわす 言 いふときんは 必 かならす 中 あたることあり 有」

子曰 しのゝたふまく 「ゆふかしつをこする事 由之瑟 鼓 なんそきうかかとにしもをいてする 奚丘門 為 もんしん 門人 しろをけいせす 子曰 しのゝたふまく 「ゆふたうにのほれとも 由也 堂 升 未 いまたしつにいらす 室 入 也

一一―13 子貢問 しこうとはく 「しとしやうとは 師 いつれかまされる 商 孰 賢 乎」 子曰 しのゝたふまく 「しはすきたり 師也過 商也 及 しやうはおよはす 曰 いわく 「しからはすなわち 然 しはまされりや 則 師愈 与 子曰 しのゝたふまく 「すきたるもなほおよはさるかことし 也 猶 過 及 也

一一―14 季氏 きし 周公 しうこうよりとめり 於富 しかるを 而 きうこれかために 求也之為 しうれんしてつけます 聚斂 而附益之 子曰 しのゝたふまく 「わかともからにはあらす 徒 非 也 小子 せうし 鼓 つゝみをならしてせめんこと 鳴 而攻之 可也 かなり」

一一―15 柴 さいは 愚 ぐなり 参 しんはろなり 也魯 師 しはへきなり 辟 也 由 ゆふはがんなり 瞎 也

二一―16 子曰 しのゝたふまく 「くわいは 回也 其庶乎 それこいねかつて 屢空 しば〳〵むなし 賜命受而 しはめいをうけすして 貨殖 くわしよく
焉憶 おもんはかるときんば 則 すなはちしは 屢中 しば〳〵あつ」

二一―17 子張善人之道問 しちやうせむじんのみちをとふ 子曰 しのゝたふまく 「あとにしもしたかわす 迹 践 亦室 又しつにしもいらす 入」

二一―18 子曰 しのゝたふまく 「ろんとくこれか 論篤是与 君子者乎 くむし人か 色莊者乎 しよくさう人か」

二一―19 子路問 しろとわく 「きくまゝに 聞 これをこなわんや 斯行諸 子曰 しのゝたふまく 「ふけいますことあり 父兄在有 いかんそそれ 如之何其
聞 きくまゝに 斯 これをこなわん 行之也 冉 ぜんゆうとはく 有問 「きくまゝに 聞 これをこなわんや 斯行諸 子曰 しのゝたふまく 由也
聞 「きくにこれをこなへ 斯行之 公西華曰 こうせいくわかいわく 「ゆふ 由也問 とはく 『きくまゝに 聞 これおこなわんや』 斯行諸 子曰 しのゝたふまく
『ふけいますことあり』 父兄在有 きう 求也問 とはく 『きくまゝに 聞 これをこなわんや』 斯行諸 子曰 しのゝたふまく
『きくまゝに 聞 これおこなへ』 之行 せき 赤也惑 まといぬ 敢問 あへてとふ 子曰 しのゝたふまく 「きうはしりそく 求也退
故 かるかゆへにすゝむ 進之 ゆうは人をかねたり 由也兼 故 かるかゆへにしりそく 退之」

二一―20 子曰 し きやうにおそる 畏顔淵 かんねんをくれたり 後 子曰 しのゝたふまく 「われ 吾 なんちをもつて 汝 以 しにけむとす 死 為矣」
曰 いわく 「し 子在 ます 回 くわい 何 なんそあへてしなん 敢死」

二一―21　季子然問　仲由・冉有　「ちうゆふ・せんきうをは　たいしんといふへしや」　子曰　しのゝたふまく　「吾以子為政　曾由求也　謂之大臣　曰可与異之問　曾由求也　謂之大臣者　道以君道　ことなるふんとす　すなわち　ゆふときうとか　ふんなり　いわゆる大しんは　みちをもつて　君に君つかふまつる　不可ふかなるときんは　則すなわちやむ　止　今いま　由ゆふときうとをは　求　具ぐしむといふへし」　曰いわく

「然しからはすなはちしたかわん人か」　子曰しのゝたふまく　「父君与弑　亦又従したかはし」　子路曰しろかいは

二一―22　子路しろ　子羔しかうをして　費ひのさいたらしむ　宰使　子曰しのゝたふまく　「夫かの人のこを　之子賊そくするなり」　子路しろかいはく　「民人有焉　社稷有　何なんそかならすしも　必ず　書しよをよんて　読　然しかうしてのちに　後　学まなふこ　みむしんあり　しやしよくあり　とをせん」　子曰しのゝたふまく　「是このゆへに　故　夫かのねいしやをにくむ　佞者　悪にくむ」

二一―23　子路しろ・曾皙そうせき・冉有せんゆふ・公西華こうせいくわ　侍しさせり　子曰しのゝたふまく　「吾わか一いちしつも　日　爾なんちにちや　長ぢ　なんちにちやうたるをもつて　吾われをもつてする事なかれ　以　無　居おるときんは　則すなはちいわく　曰　吾われを知ずる也　『我おしらす』　如もし　爾なむ　ちをしる事あらは　知　或　則すなはちなにをもつてかせんや」　何　以　哉　子路しろ　率そつしにしてこたへていわく　爾じ　而　対　曰　「せんせう千乗之国に　大たいこくのあひたにはさまつて　国　間　摂ましわり　加くわふるに　之　師しりよをもつてし　旅　以　因よするにきゝむ　飢饉　以をもつてせんに　由ゆふ　おさめは　為ゆふ　三さんねんにおよはんころおひに　之　年　及　比　勇ようあり　且又はうをしらしめつへし　方　知　也　夫ふうしわらう　子西　求　「き

う　爾なんちはいかん」　対こたへていわく　「方六七十如もしくは五六十求也為之きうをさめは三年ね
んにおよはむころをひに　及比民足使可也其礼たみたらしつへし　そのれいかくのこときんは　楽如以もつてくんしをまたん」　「せき
爾なんちはいかむ」　何如対こたへていわく　「あへてよくせんといふにあらす　能之非願ねかわくは　曰学まなひかてらにせん　焉
宗そうひようの事　廟之如もしくはくわいとうに　会同端たんしやうふして　章甫願ねがわくは　小相せうしやうたらん」　焉点「てん
爾なむちはいかむ」　何如　悪しつとこする事　鼓希まれなり　錚爾かうしとして　悪しつとをいて　舎而たつてこたへていわく　作対
「三しやのそなへにことなり」　異子者之撰　曰しのゝたふまく　何「なんそいたまんや　傷乎亦又をのをのその心さしをいふ」　各其志言也
曰いわく　「ほしゆんには　暮春者春はるのふく　服既すてになんぬ　成くわんしや五りくじん　六人とうしりく七しんを　童子六人詠而帰
て　沂浴きによくし　舞雩ぶうにふうして　風あいしてかへらん」　夫子ふうし　喟然きせんとして　歎なけいてのたふまく　曰
「我はてんにくみせん」　吾点也　三しやいてぬ　子者出　曽哲そうせきをくれたり　後曽哲そうそきがいわく　曰「かの三しやのこと　夫子者之言
いかむ」　何如　子曰しのゝたふまく　亦「又をの〳〵その心さしをゆふらくのみ」　各其志言也已矣　曰いわく　「ふうし　夫子何由なんそゆふ
晒をわらう」　晒也　子曰しのゝたふまく　「國をおさむるには　為礼れいをもつてす　以其そのこと　言譲ゆすらす　是故このゆへにわら
う」　「唯　求きうはすなわちくにゝあらすや」　則邦非也与　「安いつくんそはうりくしつしう　方六七十如もしくは五六十にし

而して　邦　非　くにゝあらさる　者　物　見　をみむ」　「たゝ　唯　せきはす　赤　なわち　則　くにゝあらす　邦　非　や　也」　「そうへうのこと　宗　廟　之事　如　もし
くはくわいとうには　会　同　しよこうにあらす　諸　侯　非　していかん　如　何　せき　赤　せうたらは　小　為　たれかよくたいたらん　孰　能　大　為

かんねん　第　てい十二

一二―1

かんねん　顔淵　しんとう　仁問　しのゝたふまく　子曰　「をのれをれいにかへるを　己　礼　復　じんとす　仁　為　一しつも　日　己　おのれをせめて　礼　復　れいにかへるときんは　天　てん下しんにきす　仁　帰　じんをすること　仁　為　をのれによれり　己　由　而　しかうして人によらん　由　乎　哉　や」　かんねん　顔淵　かいわく　曰　「そのなをこいとう」　其　目　請　問　しのゝたふまく　子　曰　「れいにあらすんは　礼　非　みることなかれ　視　勿　れいにあらすんは　礼　非　きく事なかれ　聴　勿　れいにあらすんは　礼　非　いふ事なかれ　言　勿　れいにあらすんは　礼　非　うこくことなかれ　動　勿　れ」　かんねん　顔淵　かいわく　曰　「くわい　回　ふひんなりといへとも　不敏　雖　こう　請　このことをことゝせん」　斯　語　事　矣

一二―2

ちうきうしむとふ　仲弓　仁問　しのゝたふまく　子曰　「もんをいてゝは　門　出　たいひんのみるかことくす　大賓　見　如　たみをつかふ事　使　民　事　大
いさいにつかふまつるかことくす　祭　承　如　をのむかほつせさるところを　己　欲　所　施　人にほとこすことなかれ　勿　邦　在　くにゝあつても

怨　無　家　在　怨　無　仲　弓　雍　不　敏　雖
うらむることなく　いへにあつても　うらむることなし」　ちうきうかいはく　「よふ　ふひんなりといへ
とも　請　斯　語　事　矣
こう　このことをことゝせん」

一二―3

司馬牛仁問　子曰　其言也訒也
しはきう　しん　とふ　しのゝたふまく　「しんしやは　そのことかたふす」　いわくか　「その　事　かたふす
斯仁謂可已矣乎　子曰　為之難言之訒　得乎
これをしんといふへからくのみか」　しのゝたふまく　「するにかたし　いふにかたき事なきことゑんや」

一二―4

司馬牛君子問　子曰　君子憂懼　曰　憂懼
しはきふ　くんしをとふ　しのゝたふまく　「くむしは　うれへすおそりす」　いわく　「うれいす　お懼
そりす　斯君子謂可已乎　子曰　内省疾
これをくんしといふへからくのみか」　しのゝたふまく　「うちにかへりみるに　やましからすんは
夫何憂懼
それなにをかうれへ　何なにをかをそれん」

一二―5

司馬牛憂　曰　皆兄弟有　我独亡　子夏曰　商聞之矣　死生命有
しはきう　うれへていわく　「人みなけいていあり　我ひとりなし」　しかゝいわく　「しやうきく　『し
めいあり　冨貴天にあり』　君子敬而失無　人与恭　とうやゝしして　而礼有
くんしはけいしてしつなく　人とうやゝしして　れいあらは
四海之内皆兄弟為也　君子何患乎無兄弟也
みなけいていたらん　くむしなんそけいていなきことをうれゑん」

一二―6

子張明問　子曰　浸潤之譖　膚受之愬　行焉　遠謂可也已矣
しちやうめいとう　しのゝたふまく　「しんじゆんのしん　ふしゆうのそ　をこなわれんや　さるをめいと
いふへからくのみ　しんじゆんのしん　ふしゆうのそ　おこなはれさるを　とをしといふへからくのみ」

一二―7　子貢　政　問　子　曰　食　足　兵　足　民　信之　使
しこう　まつりことをとふ　しのゝたふまく　「しよくをたし　つわ物をたし　たみをして　しんならし
矣　子貢曰　必　已　得　而　斯　何　先
む」　しこうかいわく　「かならずやむることゑすして　この三物をすては　いつれをかさきんせん」
曰　兵　去　子貢曰　必　已　得　而　斯　何
のたふまく　「へいをすてよ」　しこうかいわく　「かならずやむことゑすして　此二の物をすては　い
先　曰　食　去　古　自　皆　死　有　民　信　不
つれをかさきんせん」　のたふまく　「しよくをすてよ　いにしへより　みなしあり　たみしんあらすんは
立
たゝす」

一二―8　棘　子城　曰　君　子　質　而已矣　何　以　惜
きよくしせいかいはく　「くむしはしつのみなり　なにをもつてか　ふんをせん」　子貢曰　「を
乎　夫　子之君　子　説　也　駟　舌　及　文　猶　質　猶　文
しゐかな　ふうしのくんしをとく事　しもしたにおよはす　ふん　なをしつのことく　しつなをふんのこと
也　虎　豹之鞹　猶　犬　羊　之鞹　也
きんは　こはうのつくりかわ　なをけんやうのつくりかわのことし」

一二―9　哀公　有　若　問　曰　年　飢　用　足　如之何　有若　対　曰
あひこう　ゆうちやくにとつていわく　「としうへて　よふたらす　いかむ」　ゆふちやく　こたへていわ
盍　徹　乎　曰　二　吾　猶　足　如之何　其　徹　也　対
く　「なんそてつせさるや」　いわく　「ふたつにして　われなをたらす　いかむそ　それてつせん」　こ
曰　百　姓　足　君　孰　与　足　百　姓　足　君　孰　与
たへていわく　「はくせゐたんなは　君たれとともにかたらさらん　はくせいたらすんは　きみたれとも
足
にかたらん」

二二―10 子張問 しちやうとはく 「徳崇 とくをたつとひ 惑弁 まとひわかんことを」 子曰 しの丶たふまく 「忠信主 ちうしんをしゆとして
義徒 きにうつる 徳崇 とくをたつとんてなり 愛之 あいするときんは 其生 そのいけらんことをほつし 欲也 にくみんするときんは
其死 そのしなんことをほつす 欲也 すてにそのいけらんことをほつするときんは 既其生 又しなんことをほつす 欲死 これまと 是惑
いなり 誠以富 又まことにもつてとます 祇以異 まさにもつてことなり」

二二―11 斉景公 せいのけいこう 政孔子問 まつりことをこうしにとふ 孔子対曰 こうしこたへてのたふまく 「君君臣臣 きみ〳〵たり 臣しんたり
父父子子 ちゝ ちゝたり 子子 ここたり」 公曰 こうのいわく 「善哉信 よいかな まことなり 如君君 もし きみ〳〵たらす 臣臣 しん〳〵
臣父父子子 たらす ちゝちゝたらす 子子 ここたらすんは 粟有雖 あわありといふとも 吾豈得而食諸 われあにゑてくらわむや」

二二―12 子曰片言 子 曰 「へんけんにして 以獄 もつてうつたへをさたむへきは 折可者 それゆふか」 其由也与 しろ 子路宿諾 あらかしめだくすること
無 となし

二二―13 子曰 しの丶たふまく 「訟 うつたへをきく事 聽 われなを人 吾猶人 のことし 也 かならすうつたへなからしめんか」 必也訟 無使乎

二二―14 子張政問 しちやう まつりことをとふ 子曰 しの丶たふまく 「とるときんは 居之倦 うむことなし 無行之 おこなふときんは 忠 ちう
無 おもつてす」

12-15
子曰　君子　博(ぶ)文学(んで)　約之　礼以　亦(また)以畔弗(ざ)可
しのゝたふまく　「くんしは　ひろくぶんをまなむて　やくするに　れいをもつてす　又もつてそむかさる
(べ)矣夫　子曰　君子　成人(ひと)之美　人(ひと)之悪　成(ず)　小人　是反
へし」　しのゝたふまく　「くんしは人のびをなす　人のあくをなさす　せうじんは　これにはんす」

12-16
季康子　政　孔子問　孔子対　曰(いわく)(は)　政者正也　子師　而正(だ)
きかうし　まつり(ご)ことをこうしにとふ　こうしこたへてのたまく　「せいはせいなり　しひきいてたゝさ
(ば)　孰敢　正(だ)(ざ)
は　たれかあへてたゝしからさらん」

12-17
季康子　患盗　孔子問　孔子対　曰　苟　子欲(ず)(ば)
きかうし　ぬす人(びと)をうれへて　こうしにとふ　こうしこたへてのたまく　「いやしくも　しほつせすんは
賞之　雖　竊(じ)
しやうすといふとも　ぬすまし」

12-18
季康子　政　孔子問　曰(は)　如無(ぶだ)道　殺　以有(い)(だ)道　就(ば)　何
きかうし　まつり(ご)ことを　こうしにとつていわく　「もしふたうをころして　もつてゆうたうをなさはい
如　孔子対　曰　子　為政　焉(んぞ)殺　用　子欲善(ぜ)
かん」　こうしこたへてのたまく　「し　まつり(ご)ことをせんに　いつくむそさつをもちゐん　しせんをほ
(ば)而　民善矣　君子之徳　風(かぜ)(ぜ)也　小(じ)人之徳　草也　草　(かぜ)(ぜ)尚(は)
つせは　しかもたみよけん　くんしのとくは　風なり　せうしんのとくは　くさなり　くさに風をくわふると
(ば)　必　(ず)偃
きんは　かならすふす」

12-19
子張　問　士　何如　斯　達　謂可(べ)也　子曰　何(ぞ)哉　爾(ぢ)謂
しちやうとはく　「し　いかなる　これをかたつといふへき」　しのゝたふまく　「なんそや　なんちのい
所　達　者矣　子張　対　曰(は)　邦(くに)在　必　(ず)聞　家　在　必
ふところのたつとは」　しちやうこたへていわく　「國にあつても　かならすきこゆ　いへにあつても　かな

らすきこゆ」　子曰　しのゝたふまく　「是聞也　達　非也夫　達　質直　而　義好ぎをこ
のむ　言　察　ことをあきらかにして　而　色をみる　観　をもんはかって　以　もつて人にくたる　下　くにゝあつても　邦　在　かならすた
つす　家　いへにあつても　必　かならすたつす　達　仁　それふんは　色のまゝに　仁　じんをとつておこなふときんは　取而行　違　たかい
ぬ　居之　をるときんは　疑　うたかはす　邦　國にあつても　在　かならすきこゆ　聞　いゑにあつても　家　在　かならずきこゆ　聞」

二二—20

樊遲従舞雩之下遊曰　はんちしたかつてぶうのもとにあそふ　いわく　「あへてとふ　敢問　徳　とくをたつとひ　崇　とくをおさめ　修　まとひわ　惑　弁
かんことを」　子曰　しのゝたふまく　「よいかな　善哉　問　とふこと　事　ことをさきにして　先　うることをのちにす　得　後　とくをた
つとふるにあらすや　非　其　そのあくをせめて　攻　人のあくをせむることなし　攻之悪　毋　とくををさむるにあらすや　非　一てうの
忿　いかりに　其　その身をわすれて　忘　もつてそのしんにおよほす　以　まとへるにあらすや　惑　非　其親　及　与」

二二—21

樊遲　はんち　仁　じんとふ　問　しのゝたふまく　子曰　「人をあひす」　愛　知　ちとう　問　しのゝたふまく　子曰　「人をしる」　知　樊遲　はんち
未　いまたたつせす　達　しのゝたふまく　子曰　「なをきをあけて　直　挙　まかれるをおいて　枉　錯　よくまかれる物をして　能　枉　者　なをか
使　らしめよ」　樊遲　はんち　退　しりそいて　子夏　見　しかをみていわく　曰　「さきに　嚮　也　われふうしにまみへて　吾　夫　而　ちとひき　知問　しのゝ　子曰
たふまく　『なをき〔を〕　直　あけ　挙　まかれるをおひて　枉　錯　よくまかれる物をして　能　枉　者　なをからしめよ』　使　といつは　直

何　謂　也　冨　哉　是　言手　舜　天　有　衆　選
なんとゆふことそ」　子夏曰　「さかんなるかな　そのこと　しゆん　てん下をたもつ　しうにゑら

皐陶　挙　不仁者　遠　矣　湯　天　有　衆　選　伊尹
かうよふをあけしかは　ふじんしやはさかりき　たう　てん下をたもつて　しうにゑらんて　いいむを

挙　不仁者　遠　矣
あけしかは　ふしんしやはさかりき」

一二—22　子貢　友　問　子　曰　忠　告而　善導　不可　則　止
しこう　ともをとふ　しのゝたふまく　「たゝしくつけて　よく道ひく　ふかなるときんは　すなわちや

自　辱　焉
む　みつからはつかしむることなかれ」

一二—23　曾子曰　君子　以　友　会　友　以　仁　輔
そうしいわく　「くんしは　ふんをもつて　ともをくわいす　ともをもつて　しんをたすく」

子路第十　ていしゆう三

一三—1　子路　政　問　子　曰　先之　労之　益請　曰　倦
しろ　まつりことをとふ　しのゝたふまく　「まつして　らふせしむ」　ゑきこう　のたふまく　「うむこ

無
となかれ」

一三—2　仲弓　季氏　宰　政　問　子　曰　有司　先　小　過　赦
ちうきう　きしのさいとして　まつりことをとふ　しのゝたふまく　「ゆうしをさきんせよ　せうくわをゆ

るして　賢才　挙　けんさいをきよせよ」　いわく　焉　「いつくんそ　賢才　知　而挙之　けんさいをしつてきよせん」　曰　のたふまく　「爾　知　所　ちのしれらんところを　挙　きよせよ　爾　知　所　なんちのしらさらんところをは　人　其　乳諸　それすてめや」

一三―3

子路曰　衛君　子待　政　子将奚先　しろかいわく　「衛のきみ　しをまつて　まつりことをせんときに　し　まさにいつれをかさきんせん」

子曰　必也名正　乎　子路曰　是有哉　子之迂也　しののたふまく　「かならすなたゝしうせんか」　しろかいわく　「これあるかな　しのさかれるなり

奚其正　なんそそれたゝしうせん」　子曰　野哉　申也　君子其知所於　しののたふまく　「やなるかなゆふ　くんしはそのしらさるところにおひて

蓋闕如也　名正　蓋　けたしけつしよす　なたゝしからさるときんは　則　言順　すなわちことしたかはす　言順　ことしたかはさるときんば　則

事成　事成　なはちわさならす　わさならさるときんは　則　礼楽興　すなわちれいかくおこらす　礼楽興　れいかくをこらさるときんは　則

刑罰中　刑罰中　はちけいはつあたらす　けいはつあたらさるときんは　則　民手足措所無故　すなはちたみしゆそくをおくところなし　かるかゆへ

君子名之　君子　名　くむしは　なつくること　必言可也　必言之　かならすゆふへくす　ゆふこと　かならすおこなふへくす　君子其言

於　苟　無　而已矣　に　おひて　いやしんするところなからまくのみ」

一三―4

樊遅学　樊遅　学　はんち　まなひんとこふ　請　子曰　請　子曰　吾老農如　吾　老　圃　如　樊遅出　樊須上　子曰　小人哉　樊遅　子曰　樊須　上

ゝたふまく　「われ　らうほにしかす」　はんちいてぬ　しのゝたふまく　「われ　らうのうにしかす」　圃為学　ほつくる事まなひんとこふ　しの　しのゝたふまく　「せうしんなるかな　はんす　か

み　礼　れいをこのむときんは　則　すなはちたみあへてけいせすといふことなし　莫　上　義　かみぎをこのむときんは　則　すなわ
民　敢　ちたみあへてふくせすといふことなし　事　莫　上　信　かみしんをこのむときんは　則　民　敢　情　用　ちたみあへて心をもちいすとい
事　莫　夫　是　如　ふことなし　それかくのことときん　則　すなはちしはうのたみ　四方之民　其　襁　負　而　至矣　焉　いつくむ
稼　用　そかもちいん」

一三―5　子曰　しのゝたふまく　詩三百　誦　「しさんはくをせうす　授之　さつくるに　政　以　まつりことをもつてするときんは　達　たつせす　四方　しは
使　うにつかひとして　専　対　ひとりこたふる事　能　あたわず　多　雖　おほしといへとも　亦奚以為哉　またなにをもつてかせん」

一三―6　子曰　しのゝたふまく　「其身正　そのみたゝしきときんは　令　れいせされとものをこなわる　而行　其身正　そのみたゝしからさるとき
雖　令　んは　れいすといへとも　従　したかはす

一三―7　子曰　しのゝたふまく　「魯衛之政　ろゑいのまつりことは　兄弟　けいていのことし」

一三―8　子　し　衛公子荊　ゑいのこうしけいをのたふまく　謂　「善　よくしつにをり　室居　始　はしめあるときに　有　いわく　曰　『いやしくもあふ』　合矣
少　すこしきあるときに　有　いわく　曰　『いやしくもまつたし』　完矣　冨　さかむにあるときに　有　いはく　曰　『いやしくもよ　美
矣　し』」

一三―9 子衛適し　ゑいにゆく　冉子僕せんしぼくたり　子曰　しの丶たふまく　庶もろ〳〵あるかな　矣　冉有がいはく　既すでせんゆふかい　「庶もろ〳〵あり　矣　何又なにをかくわへむ」　加ハ焉　曰　のたふまく　既すでに富矣　「すてにとめり　何又なにをかくわゑん」　加ハ焉　曰　のたふまく

教之
「をしへむ」

一三―10 子荷しの丶たふまく　曰　「まことに　我用　われをもちゐる者物事あらは　期月きけつのみにして　而已　可也かならん　三年さんねんにして　成　なすことあらん」

一三―11 子曰しの丶たふまく　善人せんじんのくにを　為をさむること　邦　百年はくねんにして　亦以又もつて　残ざんにかつてさつとす　勝殺去

可矣つへし　誠まことなるかな　哉　是言事このこと

一三―12 子曰しの丶たふまく　「もし　如王者わうしやあらは　有必かならす　世せいにして　而　後のちにじんあらん」

一三―13 子曰しの丶たふまく　「いやしくも　苟その身をたゝしうせは　其正政まつりことにしたかはんに　従於おひては　乎　何なんかあらん　其その身をたゝしうする　正事あたはすむは　能人をたゝしうせん事　正何いかん」

一三―14 冉子ぜんし　朝てふ　退よりしりそく　子曰しの丶たふまく　「なむそ　可おそかつつる　晏也」　対こたへていはく　曰　「まつりこと　政あつつ」　予曰しの丶たふまく　「それ　其事ことならん　也　若もし　政まつりことあらは　有吾われもちいられす　以ゑ　雖といふとも

吾　其　与　聞之
われ　それあつかりきかん」

一三―15　定公問　言而　以邦興　可　有諸　孔子対　曰　言
ていこうとはく　「一けんにして　もつて國をおこすへきことありや」　こうしこたへてのたふまく　「こ
と　以是若　不可　其幾也　君為
もつてかくのこときは　あるへからす　それちかきはあり　人之言　曰
のゆふとしてのたふまく　『きみたるこ
難　臣為易　知　君為　一言　而
とかたし　しんたることやすからす』　もしきみたることのかたき事をしんぬるときんは　いちけんにして
邦興幾乎　曰　一言而邦喪可　有諸　孔子対　曰
國をおこすにちかゝらずや」　いわく　「いちけんにして國　をほろほすへきことありや」　こうしこたへての
言　以是若　不可　其幾也
たふまく　「こと　もつてかくのこときはあるへからす　それ　ちかきはあり」　人之言　曰
人のゆふとしてのたふまく
予　違莫　楽　無　唯其言　而　予違　莫
「われ　きみたることを　たのしむことなし　たゝそれゆふときにして　我にたかふことなからんことを
楽也　如其善而違莫也　亦善　乎　如不善而　違事
たのしむ　もしそれ　せんにしてたかふことなきときんは　又よからすや　もしふせんにして　たかふ事
莫也　一言而　邦喪　幾乎
なきときんは　いちけんにして　くにをほろほすに　ちかゝらすや」

一三―16　葉公　政　問　子　曰
せうこう　まつりことをとふ　しのゝたふまく
近者悦　遠者来
「ちかき物よろこふときんは　とをき物きたる」

一三―17　子夏　莒父宰　政　問　子　曰
しか　きよをふのさいとして　まつりことをとふ　しのゝたふまく
速　欲　母
「すみやかにせまくほつする事なかれ
小利見　則達　小利見
せうりをみることなかれ　すなわちたつせす　せうりをみるときんは

則　すなわち　大　しならす　事成

一三―18　葉公　せうこう　孔子語　曰　こうしにかたっていわく　吾党　「我　たうに身をなおふする物あり　躬直者有　其父　そのちゝ　羊　ひつしをぬすめり　而　しかるを　子証之　こあらわす」　孔子曰　こうしののたふまく　「吾党之直者　わかたうのなをき物は　是異　これにことなり　父　ちゝは　子　この　為隠　ためにかくし　子　ちゝのためにかくす　為隠　なをきこと　直　そのなかにあり」　其中在矣

一三―19　樊遲　はんち　仁問　しんとふ　子曰　しのゝたふまく　「きよしよには　居処　けうあり　恭　事　ことをとつては　執　けいあり　敬　人とちうあらは　いてきにゆくといふとも　夷狄之　雖　すつへからす」　棄可也

一三―20　子貢　しこう　問　とつていわく　曰　「いかなる　何如　これをかしといふへき」　斯士謂之可矣　子曰　しのゝたふまく　「をのれをおこなふに　己行　はちあり　恥有　四はうにつかひをして　四方使　くむめいをはつかしめさるを　君命　しといふへし」　辱　士謂可　いはく　「あへて　敢　その　次　つきをとふ」　問　のたふまく　「そうそくには　宗族　かうをせうす　孝称　きやうたうには　郷党　ていをせうす」　悌称　いはく　「あへて　敢　その　其　そのつきをとふ　次問　のたふまく　「ことはかならすしんあり　言必信　かふはかならすはたす　行必果　かう〳〵せん　硜々然　たるは　小人　せうしんなり　也　そも〳〵　抑　又もつて　以亦　つきとすへし」　次為可矣　いはく　「いまのまつりことにしたかふ物　今之政従者　いかん」　何如　しのゝたふまく　「いゝ　子曰　とさうの人　斗筲之人　なんそかそふるにたらん」　何算足也

一三―21 子曰　しのゝたふまく　「中行得而　与之　ちうかうをえて　くみせすんは　必狂　かならすきやうけんか　狷乎　狂者進　きやうしやはすゝんてとる　狷者　けんしやはせさるところあり」　為所有也

一三―22 子曰　しのゝたふまく　「南人　なんしん　言有　いへることあり　曰　いわく　『人而恒　人としてつねなきをは　以巫医　もつてふいにおさむへ　作　可善夫　からす　よいかな」　「其恒　そのとくを　つねにせさるときんは　或羞承之　つねにはちをうく」　子曰　しのゝたふまく　「うら　占　なわさらくのみ」　而已矣

一三―23 子曰　しのゝたふまく　「君子和而同　くんしは　くわしてと〈う〉せす　小人　せうしんは　とうしてくわせす」

一三―24 子貢問曰　しこう　とつていわく　「郷人　きやう人に　皆好之　みなよみんせられんは　何如　いかん」　子曰　しのゝたふまく　「未可　びかなり」　郷人　きやう人に　皆悪之　みなにくみんせられんは　何如　いかん」　子曰　しのゝたふまく　「未可也　びかなり　如　しかじ　郷人　きやう人のよ　善者　き　物には　好之　よみんせられん　其不善者　そのよからさる　物には　悪之　にくまれんには　也

一三―25 子曰　しのゝたふまく　「君子　くんしは　事易而　つかへやすふして　悅　よろこはしめかたし　難也　悅之　よろこはしむるに　道　みちをもつて　以　せさるときんは　悅　よろこひす　其使　その人をつかふにおよんては　及也　器　うつは物のまゝにす　小人　せうしんは　事難　つかへかた　而悅易也　ふして　よろこはしめやすし　悅之　よろこはしむるに　道以　みちをもつてせすといへとも　雖悅也　よろこふ　其使　その人をつかふ

及 也 備 求 焉
におよんては つふさならんことをもとむ」

一三―26 子 曰 君子 泰 而 驕 小 人 驕 泰
しのゝたふまく 「くんしは ゆたかにしておこらす せう人は おこつてゆたかならす」

一三―27 子 曰 剛 毅 木 訥 仁 近
子 曰 「かうぎぼくとつは じんにちかし」

一三―28 子路 問 曰 何如 斯 士 謂可矣 子 曰 切々偲々怡々如
しろ とつていわく 「いかなる これをか しといふへし」 しのゝたふまく 「せつ〳〵しゝいゝしよ

士 謂可矣 朋友 切々偲々 兄弟 怡々如也
たり しといふへし ほうゆうにはせつ〳〵しゝ けいていにはいゝじよたり

一三―29 子 曰 善 民 教 七年 亦 以 戈 即可矣
子 曰 「せん人のたみををしゆる事 七年にして またもつてつわものにつくへし」

一三―30 子 曰 教 民 以 戰 是 棄 謂
子 曰 「をしへさるたみをもつて たゝかわしむ これをすつといふ」

憲問 第十四
けんぶん ていじふし

一四―1 憲 恥 問 邦道 有 穀 邦道 無 穀 恥 也
けん はぢをとふ 子曰 「國 みちあるときんばこくす 國 みちなきときにこくするは はぢなり」

一四―2 剋 伐 怨 欲 行 焉 以 難 為矣 仁
こく・はつ・ゑん・よく をこなわれさるをもつて じんとすへし 子曰 「もつてかたしとすへし じ

んはすなはち　則　吾　不知　也
われしらず」

一四―3　子曰「士　而　居　懐
しとして　きよをやすんずるは　以　士　為　不足矣
もつてしとするにたらず」

一四―4　子曰「邦　道　有　言　危
くに　みちあるときんば　ことはげしうし　行　危
かうはげしうす　邦　道　無
くに　みちなきときんば　行
かうはけしうして　言　遜
ことしたかふ」

一四―5　子曰「徳　有　者　必　言　有　言　有　者　必　徳　有　仁　者　必
とくあるものは　かならずことあり　ことあるものは　かならずとくあらず　じんしやは　かな
らずようあり　勇　有　勇　者　必　仁　有
ようしやはかならず　じんあらず」

一四―6　南宮
なんきうくわつ　孔子に　問　曰
とつていわく　羿　善　射　奡　舟
「げいよくゆみい　がう　ふねをを　盪　俱
ともに　其　死　然　得
そのしぜんをえず
禹　稷　躬　稼　而　天　下　有
う・しよく　みづからかして　てんかをたもつ」　夫　子　答
ふうし　こたへず　南宮
なんきうくわつ　いでぬ　子曰
君　子　哉　若　此　尚　德　哉　若　此
「くんしなるかな　かくのことき人　とくをたとふるかな　かくのことき人」

一四―7　子曰「君　子　而　不　仁　者　有　矣　夫　未
しのたまふ　くんしにして　じんあらざるものはあらん　いまだあらし
小　而　仁　者　也
せう人にして　じんあるものは」

一四―8　子曰「愛　之　能　勞　乎　忠　焉　能　誨　乎
しのたまふ　あいせは　よくらうすることなけん　ちうせばよくをしゆることなからんや」

一四―9　子曰「命　為　裨　諶　草　創　之　世　叔　討　論　行　人　子　羽　修　飾
しのたまふ　めいをつくる時に　ひしんさう〳〵す　せいしく　たうろんす　かうじんしう　しうしよくす

東里子産　潤色之
とうりのしさん　じゆんしよくす」

一四―10 或ある人　子産しさんをとふ　問　子しのたまふ　曰「恵人也けいじんなり」　子西しせいをとふ　問ノのたまふ　曰「彼かれをざへや彼哉〳〵」　管仲くわんちうをとふ　問ノのたまく　曰「人也じんなり」　伯氏駢邑はくしのへいゆう　三百はくをうばつて　奪　蔬食そしを　飯はんにして　歯としををえしむれども　怨　言　無
も　うらみのことなし」

一四―11 子しのたまふ　曰「貧まづしうして　而　怨うらみなきことは　無　難かたく　富とつて　而　驕おごることなきことは　無　易やすし」

一四―12 子しのたまふ　曰「孟公綽まうこうじやくてう・趙ぎ　魏　老きのらうたるときんば　為　則すなはちゆたかなり　優　以もつて　大とうせつのたい
夫　為　可　也
ふたるへからず」

一四―13 子路しろ　成せいじんをとふ　問ノのたまく　曰「臧ざ武ぶ仲ちうがち　之　智こうじやくがふよく　公綽　不　欲へんさうしがよう　卞べ莊子　之　勇ぜんきうがけ　冉求　之げ
芸　若いのごとくして　文　之かざるにれいがくをもつてす　礼　楽　以　亦またもつて　成せいじんとすへしや」　為べ可　矣　曰のたまく「今いまのせいじん　之　成　人
者は　何なんそかならずしも　必　然しからん　利りをみては　見　義ぎをおもふ　思　危あやうきをみては　見ふ　命めいをさづく　授　久　要きうようにして　平生へいせいのことを　之　言わすれす　忘　亦またもつて　以　成せいじんとすべし　為　可　矣」

一四―14 子し　公こうしくぶんしを　叔　文　子　公こうめいかに　明　賈とつて　問ノのたまく　曰「信まことなるかな　乎　夫ふうしは　子　言いわず　笑わらはす　取　と

らずいふこと」　乎　公明賈　対　曰(は)　以　告　者(ひと)過　夫子　時
こうめいか　こたへていわく　「もつてまうせる人のあやまち也(なり)　ふうしは　ときあつて
然　後　言　厭(はず)也　楽　然　後　笑
しかうしてのちにいふ　人(ひと)そのいふことをいとわす　たのしみあつて　しかうしてのちにわらふ　人(ひと)その笑わ
らふことをいとわす　義　然　後　取　厭(は)也　其(しのたふまく)
ぎあつて　しかうしてのちにとる　人(ひと)其(その)とることをいとわず」　子　曰　「それは
然　豈　其　然　乎
しかなり　あにそれしからんや」

一四―15
子(しのたのまく)曰　「臧(ざ)武仲　以　防(ば)　魯　後　為　求　君　要(え)　曰　雖
「さうぶちう　はうをもつて　ろにのちたらんことをもとむ　きみをようせずといふとも
吾　不信　也
われはしん(ぜ)じ」

一四―16
子(しのたのまく)曰　「晋　文　公　譎(は)　而　不　正
「しんのぶんこうは　いつわつてたゞしからず　斉　桓　公　正　而　不　譎(は)
せいのくわんこうは　たゞしうしていつわら
ず」

一四―17
子路(しろがいはく)　曰　「桓　公　公　子糾　殺　召忽　死之
「くわんこう　こうしきうをころすときに　せうころしぬ
管　仲　不死　未(いはく)　仁
くわんちうしなず　曰　「いまだじ
乎　子(しのたのまく)曰　「桓　公　九　諸　侯　合　兵　車　以
んあらずや」　「くわんこう　こゝのたびしよこうをあはすれども　へいしやをもつてせざることは
管　仲　之力　也　其(そ)(じん)如　其(そ)(じん)如
くわんちうがちからなり　其ノ仁にしかんや　其ノ仁にしかんや」

一四―18
子貢　曰(は)
しこうがいわく　「管　仲　仁　者　非(ず)与　桓　公　公　子糾　殺　死
「くわんちう　じんしやにあらずや　くわんこう　こうしきうをころすときに　しぬるこ

能とあたはすして　又相之しやうたり」　子曰「管仲桓公相くわんこうをたすけて　諸侯覇しよこうにはとして
一ひとつに　天下匡てんかをたゞしうせり　民たみ　于今到いまにいたるまで　其賜そのたまものをうく　受管くわんちう　仲微なかつせば
吾われ　其髪それかみをかうふり　被祇じんをひたりにしてまし　左矣あに　豈匹夫ひつふ　匹婦ひつふのまことをするが　為也　自溝みづからこ
瀆うとくにくびれてしらるゝことなきがごとくあらんや　経而知　莫若也」

一四―19　公叔文子之臣大夫僎こうしくふんしかしんたいふせん　文子与同ふんしとおなじくこうにのぼれり　公升　子聞之し きいて　以曰「もつてふんと
為可矣すべし」

一四―20　子曰「衛霊公之無道也ぶたうなり」　康子曰かうしがいわく「夫是かくのこときは　奚而いかんじてか喪ほろ
びざる」　孔子曰「仲叔圉ちうしゆくぎよは　賓客ひんかくをおさむ　祝鮀しくたは　宗廟そうひようをおさむ　王孫賈わうそんか
は　軍旅くんりよをおさむ　夫是かくのこときば　如奚いかんじてか　其喪それほろびん」

一四―21　子曰「其それ　言之作ゆふにはちざるときんば　則其それすなはち　為之するにかたし　難也」

一四―22　陳成子簡公弑ちんせいし　子かんこうをしせり　孔子沐浴而ぼくよくして　朝てうして　哀公告あいこうにまふして　曰「陳恒ちんごう
其君そのきみを　弑しせり　請こう　討たうせん」　公曰こうのいわく「夫二三子かのじさんしに　告つけよ」　孔子曰こうしの　給まく「吾

か大ふの　しりゑにしたがへるをもつて　敢　あへてまうさずんはあらず　君　曰　夫三子者　きみのいわく　『かのさんしや
告　つけよ』」　二三子之　しさんしにゆひて　「ふかなり」とつく　不可告　孔子曰　こうしの給まく　吾夫之後　「わか大ふのしりゑにしたがへ
るをもつて　以　あへて申　敢　さずんは　あらす　告　「」

一四―23　子路　君　事　問　子曰
しろ　きみにつかへんことをとふ　しのゝたふまく　欺　「あさむくことなふして　勿而　犯之　をかせ」

一四―24　子曰
しのゝたふまく　「くんしは　君子　しやうたつす　上達　せうしんは　小人　かたつす　下達」

一四―25　子曰
しのゝたふまく　「いにしへのかくしやは　古之学者　おのんかためにす　己為　いまのかくしやは　今之学者　人のためにす　為人也」

一四―26　蘧伯玉
きよはくきよく　人をこうしにつかゐとす　孔子使　こうし　孔子　これといてとふ　之与坐而問　のたふまく　曰　「ふうしは　夫子　なにを
かする」　対　こたへていわく　「ふうしは　夫子　そのあやまち　其過　すくなからまくほつすれとも　寡欲　しかもいまたあたは　而未能
す」　使者　ししや　いてぬ　出　しのゝたふまく　子曰　「つかひなるかな　使乎　つかひなるかな　使乎」

一四―27　子曰
しのゝたふまく　「そのくらいにあらずんは　其位　ゑ　不在　ぼ　其政　そのまつりことをはからず　不謀　」

一四―28　曾子曰
そうしかいわく　「くんしは　君子　おもふこと　思　そのくらゐより　其位　いたさず　不出　」

一四―29　子曰
しのゝたふまく　「くんしは　君子　そのことの　其言　そのかうにすきんことをはつ　其行　過　恥也　」

一四—30 子曰 しのゝたふまく 「君子道者三つ 我能 われよくする事なし 無焉 しんしやはうれゑす 仁者不憂 ちしやはまとはす 知者不惑 よふしやはおそりす」 勇者不懼 しこうかいはく 子貢曰 「ふうし 夫子自道也 みつからいつて」

一四—31 子貢 しこう 人をはうす 方 子曰 しのゝたふまく 「し 賜也 われにまされるかな 我 賢乎 われはすなはちいとまあらす 則 不暇」

一四—32 子曰 しのゝたふまく 「うれへされ 不患 人のをのれをしらさることを 人之己 不知 うれへよ 患 己 おのんかのうなきことを 也 無能」

一四—33 子曰 しのゝたふまく 「あらかしめいつわらす 逆詐不億 おもんはからす 不憶 しんあらす 不信 そも〳〵 抑亦先覚 又 まつさとる物 者 これ 是 賢乎 けんならんか 乎」

一四—34 微生畝 ひせいほ 孔子謂 こうしにかたつて 曰 いわく 「きう 丘 なんすれそ 何為 これをせい〳〵する 是栖々者 人か 与 むしろねいをせんか 無乃佞乎」 孔子対曰 こうしのこたへてのたふまく 「あへて 敢 ねいをせんとにあらす 佞為非 いやしきことをにくむてなり 也固疾也」

一四—35 子曰 しのゝたふまく 「騏 きは 其 そのちからをせうせすして 力 不称 そのとくをせうす 其徳称」

一四—36 或曰 ある人のいわく 「とくをもつて 徳以 うらみをむくゐは 怨報 いかん 何如」 子曰 しのゝたふまく 「なにをもつてか 何以 くをむくいん 直 ちよくをもつて 以 うらみをむくい 怨報 とくをもつて 徳以 とくをむくゆ 徳報」 と 徳

一四—37 子曰 しのゝたふまく 「われをしることないかな 我知莫也」 子貢 しこうかいわく 「なんすれそ 何為 それ 其 しをしる事なから 子知莫 ら

也　子　曰　　天　不怨　　不尤　　上達　　知者　　其
ん」　しのゝたふまく　「てんをもうらみず　人をもとがめず　かゝくしてしやうたつす　我をしる物は　そ
天乎
れてん下」

一四—38　公伯寮　子路　季孫　愬　子服景伯　以　告曰　夫子　固　惑志
こうはくれう　しろをきそんにそす　しふくけいはく　もつて　申いわく　「ふうし　まことにまとへる
心有　公伯寮　於　吾力　能　市朝　肆諸
さしあり　こうはくれうにおひて　わかちからを　猶よくしてうにしせしめてん」　子曰　道
之　将　行　也与　命　也　道之　将　廃　也与　命　也　公伯寮　其
ちのまさにおこなわれんとするも　めいなり　みちのまさにすたれんとするも　めいなり　こうはくれう　そ
命　如何
れ　めいをいかゝせん」

一四—39　子曰　賢者　世　避　其　次　地　避　其　次　色　避　其　次　言
しのゝたふまく　「けんしやは　よをさる　そのつきはちをさる　そのつきは　色をさる　そのつきは　こ
避
とをさる」

一四—40　子曰　作者　物　七人矣
しのゝたふまく　「する物　しち」

一四—41　子路　石門　宿　石門　晨門　曰　奚　自
しろ　せきもんにやとる　せきもんのしんもんのいわく　「いづくよりそ」　子路曰　孔子　自
しろかいわく　「こうしより
曰　是　其　不可　知而　為之者与
いわく　「これは　そのふかなることをしつて　する人か」
なり」

一四—42　子磬　衛　擊　簣　荷　而　孔子之門　過者　有　曰　有　哉　磬
けいを　ゑいにうつ　あちかをになつて　こうしのかとをすくる物あり　いわく　「心あるかな　けい

撃乎 既而 曰 鄙哉 硜々乎 己知莫也斯 己
をうつ事 すてにして いわく 「いやしいかな かう〳〵ことして をのれをしることなき事 これ お
而已矣 深則厲 浅則揭 子曰
のれのみなり 『ふかきときんは すなわち れいす あさきときんは すなわちけいす』」 しのゝたふま
果哉 末矣
く 「くわなるかな かたきことなきこと」

一四—43 子張曰 書云 高宗諒陰 三年 言 何
しちやうかいはく 「しよにいはく 『かうそう まことにもたして 三ねん 物いわずといつは なんと
謂 子曰 何必 高宗 古之皆然
いふ事そ」 しのゝたふまく 「なんそかならすしも かうそうのみならん いにしへの人 みなしかり
君 堯 百官 己 総 以冢宰聴
きみ こうじぬるときに はつくわん をのれにすぶ もつててうさいにきくこと三ねん」
上 礼 好 民使易也
一四—44 子曰
しのゝたふまく 「かみ れいをこのむときは すなはちたみつかひやすし」
子路君子問 子曰 己 修 以 敬
一四—45 しろ くんしをとふ しのゝたふまく 「をのれをおさめて もつて人をけいす」 曰 斯如
而已乎 曰 己 修 以 安 斯 如 而已乎
きのみか」 のたふまく 「をのれをおさめて もつて人をやすんす」 いはく 「かくのこときのみか」
曰 己 修 以 百姓安 己 修 以 百姓安
のたふまく 「をのれをおさめて もつてはくせいをやすんす をのれをおさめて もつてはくせいをやす
堯舜 其 猶病諸
んずるは きう・しゆんも それ なをやめり」
原壌夷俟 子曰 幼而遜悌 長而述
一四—46 けんじやう うずゐにしてまつ しのゝたふまく 「ゆうにして そんていならす ちやうして のふるこ

無焉　老而不死　是　賊為
となく　おひてしなさるは　これ　そくをするなり」　といつて　杖以　其　脛叩
つへをもつて　そのはきをうつ

一四—47　闕党童子命　将矣　或問之曰
けつたうのたうし　めいをおこなふ　ある人　とつていわく　「益者与
益求者非速成
益きしやか」　子曰　しのゝたふまく　「吾
其位　踞見也　其先生与竝行見也
そのくらゐにをるをみる　そのせんせいとならひゆくをみる
益きをもとむる人にあらす　すみやかにならまくほつする物なり」　欲者也

衛霊公第十（ていしゆう）五

一五—1　衛霊公陳孔子問孔子対曰
ゑいのれいこう　ちんを　こうしに　とふ　こうし　こたへてのたふまく
「俎豆之事則嘗聞之矣軍旅之事未学
「そとうのことは　すなはちむかしよりきゝき　くんりよのことは　いまたまなひす」
明日遂行陳在粮絶
めひじつに　つゐにゆく　ちんにあつて　かてたへぬ
従者病能興莫見曰
せうしややんて　よくをくることなし　しろ　いかつてまみへていわく
「君子亦窮乎　子路慍見曰
「くんし又きうすや」　しの
斯濫矣
ゝたふまく　「くむし　まことにきうす　小人窮
せうしん　きうしてはこれらんす」

一五—2　子曰賜也汝予以
しのゝたふまく　「し　なむちわれをもつて　多学而識之者為与
おほくまなんて　しれる人とするか」　対曰
こたへていわく

「然しかなり　非あらすや」　曰のたふまく　「非也あらす　予われはいつこれをもつてくわんせり」　一以貫之

一五―3　子曰しの丶たふまく　「由ゆふ　徳とくをしれる　知者もの　鮮すくなし」　矣

一五―4　しの丶たふまく　「無為ぶゐにして　而　治おさまれること　者　其それしゆんか　舜也　夫それ　何なにをかせんや　為　哉　己をのれをうや　恭くしうして　正まさしくなんめんすらくのみ」　南面　而已矣

一五―5　子張しちやう　行をこなわれんことをとふ　問　子しの丶たふまく　「言こと　忠ちうしんあり　信　行かう　篤とつけいあらは　敬　貊ばくのくにといふともをこなわれん　之邦　雖　行をこなわれんや　乎哉　立たてるときんは　則すなはち　其そのまへに　前　参しんせんたるをみる　然　見　輿よにあるときんは　在　則す　言こと　忠ちうしんあらす　信　行かう　篤とつけいあらすんは　敬　州しうりといふと　里　雖　乎哉

一五―6　子曰しの丶たふまく　「直ちよくなるかな　哉　史しきよ　魚　邦くにみちあれとも　道　有　矢やのことし　如　君くんしなるかな　子　哉　蘧きよはく　伯玉　邦くにみちあるときんは　道　有　則すなわち　仕つかふ　邦くにみちなきときんは　道　無　則すなはちまいてふところにしつ　卷　而懐　可

きよく　へし」　也

一五―7　子曰しの丶たふまく　「ともにいふへくして　与　言　可　而　与ともにいわさるは　不　言　人をうしなへるなり　失　与ともにいふへからすし　言　可

て　而　与　言之　言　失　ともにいふは　ことをうしなへるなり　知者　ちしやは　人をもうしなはす　不失　亦言　又　ことをもうしなわす　不失

一五―8　子曰　しのゝたふまく　「しゝじん〳〵は　志士仁人　生　せいをもとめて　求　以　もつてじんをやふることなし　仁　害　無　身をころして　殺　以　もつてしんをなすこと　仁　成　有　あり」

一五―9　子貢　しこう　仁　為　じんせんことをとふ　問　子曰　しのゝたふまく　「たくみ　よくせんとほつするときんは　其事工　善　欲　其事　必　かならすまつ　其　器　そのうつわ物をとくす　利　是　邦　居　也　其　大　夫之賢　者　事　このくにゝいて　そのたいふのけんやしにつかへて　其　仁者　そのしんしやをともにす　友　也」

一五―10　顔淵　かんねん　邦　國　おさめんことを　為　とふ　問　子曰　しのゝたふまく　「かのときをこなへ　夏之時　行　殷之輅　乗　いんのろにのれ　周之冕　服　べんをふくせよ　楽　かくはすな　則　わちせうふをせよ　韶舞　鄭声　ていせいをはなち　放　佞人　ねいしんをさけよ　遠　鄭声　ていせいはいんなり　佞人　ねいしんはあやうし　殆　あやうし」

一五―11　子曰　しのゝたふまく　「人として　而　とをきをもんはかりなきときは　遠　慮　無　必　かならすちかきうれへあり」　近　憂　有

一五―12　子曰　しのゝたふまく　「やんぬるかな　已　矣乎　われいまたみす　吾　未　見　とくをこのむ事　徳　好　色　いろこのむかことくする物を」　如　者　也

一五―13　子曰　しのゝたふまく　「さうふんちうは　臧文仲　それ　其　くらゐをぬすめる人か　位　竊　者　らうかけいかけんなることをしつて　与　柳下恵之賢　知　而　ともにたてらす」　与　不立　也

一五―14 子曰「み　自つから厚而人をせむるにうすきときんば　則すなわち　怨うらみにさかる」　遠矣

一五―15 子曰「如之何　不曰　如之何　者　吾　也已矣いかんといわずして　いかんといふは　われ　いかんといふこと　未なからまくのみ」

一五―16 子曰しのゝたふまく「羣居　終日　言ひねもすにいへとも　義ぎに及はす　好このんてしようけいをおこなふ　小慧行事難かたいかな」　矣哉

一五―17 子曰しのゝたふまく「君子義ぎ　これをもつて　以質しつとす　為礼れいこれをもつて　以行之おこなふ　遜そんこれをもつて　出之いたす　信しんこれをもつてなす　以成之　君子くんしなるかな」　哉

一五―18 子曰しのゝたふまく「君子くんしは　能のふ無なきことをやむ　病人のをのれをしらさることを　知ぎ　不病也やます」　己

一五―19 子曰しのゝたふまく「君子くんしは　世をおふれとも　没而名なのせうせられさることをやむ　称ぎ　疾焉」

一五―20 子曰しのゝたふまく「君子くんしは　をのれをせむ　己せうしんは　求諸人をせむ」　小人　求諸

一五―21 子曰しのゝたふまく「君子くんしは　矜おこそかにしてあらそはす　而くんして　不争　羣　而たうせす　不党」

一五―22 子曰しのゝたふまく「君子くんしは　言ことをもつて人をきうせす　以人をもつてことをすてす　言　挙　以　言　廃」

一五―23 子貢問しこう　曰とつていわく「一言いちけんにして　而もつてみをおふるまてにをこなふへきこと　以身終行可ありや」　有乎　子曰しのゝ

たふまく　「それ　しよか　おのんかほつせさるところを　人にほとこすことなかれ」
其　恕乎　己　欲　所　施　勿也

一五―24　子曰　しのゝたふまく　「わか　人におけること　たれをかそしり　たれをかほめん　もし　ほむへきことあると
吾之　於　也　誰　毀　誰　譽　如　譽可
者　其　試　所　有矣　民　斯　也　代　直　道　而　行　所
きんは　それ　心　みるところあり　たみをかくのことくするは　三たいのちよくたうとして　をこなふゆゑ
以　也
んなり」

一五―25　子曰　しのゝたふまく　「われ　なを　しのけつふんにをよへり　むまある物は　人にかしてのらしむ　いまはす
吾　猶　史之闕文　及也　馬　有者　借　乗之　今　則
なはちなひかな」
亡　矣夫

一五―26　子曰　しのゝたふまく　「かうけんは　とくをみたる　せうをしのひざるときんは　たいほうをみたる」
巧言　德　乱　小　不忍　大謀　乱

一五―27　子曰　しのゝたふまく　「しうのにくみんするをも　かならすさつす　しうのよみんするをも　かならすさつす」
衆　悪之　必　察焉　衆　好之　必　察焉

一五―28　子曰　「人よくみちをひろむ　みちの人をひろむるにあらす」
能　道　弘　道　弘　非也

一五―29　子曰　「あやまつてあらためさる　これをくわといふ」
過　而　不　改　是　過　謂矣

一五―30　子曰　「われむかし　ひめもすにしよくせす　よもすからいねすして　もつておもつしかとも　ゑきなか
吾　嘗　終　日　不　食　終　夜　不寝　以　思　益　無
りき　しかし　まなふるには」
不如　学　也

一五―31 子曰「君子道謀食不謀耕たかへすときんは餒其中在矣
るときんは禄其中在君子道憂貧不憂也
ろくそのなかにあり くんしはみちをうれう まつしきことをうれへす」
一五―32 子曰「知及之仁能守之不能得之雖必失之
じんまほることあたわざるときんは 得たりといへとも かならすうしなつ
知及之仁能守之莊以不莅之則民不敬
をよひ しんよくまほれとも いつくしうして もつてのそまさるときんは すなわちたみ けいせす
知及之仁能守之莊以莅之動之礼以
をよひ しんよくまほり いつくしうして もつてのそめとも うごくにれいをもつてせさるときんは
未善也
またよからす」
一五―33 子曰「君子小知不可而大受可也小人不
しのゝたふまく「くんしは せうちすへからす しかうしてたいしうすへし せうじんは たいしうすへ
可也而小知可也
からす しかうしてせうちすへし」
一五―34 子曰「民之仁於也水火於甚水火吾蹈而死
しのゝたふまく「たみのしんにおけること すいくわよりも はなはたし すいくわをは われふんてし
者見矣未仁蹈而死者見也未仁蹈而死者見也
ぬるものをみる いまたしんをふんて しぬる物をみす いまたじんをふんて しぬるものをみす」
（衍 カ）
一五―35 子曰「仁当師不譲
しのゝたふまく「しんにあたつては しにゆずらす」
一五―36 子曰「君子貞而不諒
しのゝたふまく「くんしはたゝしうしてまことあらす」

一五―37　しのゝたふまく　「きみにつかふまつることは　其事敬而　そのことをつゝしんて　其食後　そのしよくをのちにす」

一五―38　子曰　しのゝたふまく　「教有　かうあつて　類無　るいなし」

一五―39　子曰（しのゝたふまく）　「道（みち）　不同（をなじ）　をなしからさるときんは　相為（あいため）　あいためにはからす　不謀（はからす）」

一五―40　子曰（しのゝたふまく）　辞（ことはは）　達而已矣　たつすらくのみ」

一五―41　師冕見（しべんまみゆ）　階及（はしにいたる）　子曰（しのゝたふまく）　「階也（はしそ）」　席及也（せきにいたる）　子曰（しのゝたふまく）　「席也（せきぞ）」　皆（みなさ）坐（す）　子告之曰（しつけてのたふまく）　「某（それは）　斯在（こゝにあり）　某（それは）　斯在（こゝにあり）」　師冕（しへん）出（いてぬ）　子張（しちやう）問（とつ）ていはく　「師（しと）与言之（いつつるは）　道与（みちか）」　子曰（しのゝたふまく）　「然（しかなり）　固（まことに）　師相之道也（しをみちひくみちなり）」

季氏第十六（きしていりく）

一六―1　季氏（きし）将顓臾伐（まさにせんゆをうたんとす）　冉有（ぜんゆふ）・季路（きろ）　孔子見（こうしにまみえて）　曰（いわく）　「季氏（きし）将顓臾（まさにせんゆに）事有（ことあらんとす）」　孔子曰（こうしのたふまく）　「求（きう）　無乃爾是過与（むしろなんちこれあやまてるか）　夫顓臾（それせんゆは）　昔者（むかし）

先王せんなふ　これをもつて　以　東蒙とふまうのしゆとせり　主　為　且又　邦はういきのうちにあり　域　之中　在矣　是これ　社しやしよくのしんな　稷　之　臣　也

何なにをもつてか　以　伐うつことをせん」　為　也　冉せんゆふかいわく　有曰「夫ふうしはほつす　子　欲之　吾われちしん　二臣　皆みなほつせ　不欲也

孔こうしの　子　曰給まく　求「きう　周しうじん　任　言いへることあり　有　曰いわく　力『ちからをのへて　陳　列れつにつく　就

求「きう　君くんし　子　夫かれをにくむ　疾　欲之ほつすといふを　曰　舎すてゝ　而　必かならすさらにことはをつくる　為之　丘きう　也

聞きく　国『くにをたもち　有いゑをたもつ物は　家すくないことをうれへすして　有　者　寡すくないことをうれへすして　不患　而　不均ひとしからさることを　患うれう

貧まつしきことをうれへすして　不患　而　不安やすからさることをうれう』　患　蓋けたし　均人しきときんは　貧まつしきことなく　無

寡すくないことなし　無　安やすきときんは　安かたふくことなし　無　夫それ　是かくのことくなるゆへ　如　故

遠に　人ゑんしん　不服ふくせさるときんは　則すなはち　文徳ふんとくをおさめて　修　以もつてきたす　来之　既すてにきたすときんは　来之

則　安之　今　由与求　也　夫子相
すなわちやすんず　いま　ゆふときうとは　ふうしをたすく　遠　ゑんしん　人　不服　而　来
あたはす　不能也　邦　くに　ふんほうりせきすれとも　離折　而　守　まほることあたはす　不能也　干戈　かんくわを　邦内　はうたいにうこかさんこと　動
謀　吾　恐　季孫之憂　顓臾　不在而　蕭牆之内　在也
をはかる　我　おそらくは　きそんかうれゑの　せんゆにあらすして　せうしやうのうちに　あらん」

一六―2　孔子曰
こうしののたふまく　「天下道あるときんは　則　すなはち　礼　れいかくせいはつ　楽征伐　天しよりいつ　自　出　天下無　てんか　道な
きときんは　則　すなわちれいかくせいはつ　礼楽征伐　諸侯自出　しよこうよりいつ　諸侯自出　しよこうよりいて丶は　蓋　けたし　十世　しうせいにし
て　不失　しつせす　希矣　すくなし　大夫自出　たいふよりいて丶は　五世　五せいにして　不失　しつせす　希矣　すくなし　陪臣　はいし
ん　国命執　こくめいをとつては　三世　三せいにして　不失　しつせす　希矣　すくなし　天下道あるときむは　則　すなはち　政
つりこと　大夫不在　たいふにあらす　天下道あるときんは　則　すなはち　庶人不議　しよしんはからす」

一六―3　孔子の曰
「ろくの　禄之公室去　こうしつをされること　五世矣　五せい　政大夫　まつりことのたいふにをよへること　逮　四世　四せい
故に　夫　かの三桓　子孫微矣　ゆゑ　さん　くわんのしそんひなり」

一六―4　孔子曰
「ゑきしや　益者三友　三ゆう　損者三友　そんしや　三ゆう　直友　なをきをともとし　諒友　まことあるをともとし　多聞　たふんを
ともとするは　益矣便辟友　ゑきなり　へんへきをともとし　善柔友　せんしうをともとし　便佞友　へんねいをともとするは　損矣　そんなり」

一六―5
孔子ノ曰
「益者三楽 損者三楽
礼楽節
人之善導
をねかひ 賢友多 楽
益矣
騎楽楽
佚遊楽
宴楽楽
かふは 損矣 そんなり」

一六―6
孔子の曰
「君子侍 三愆有 言未及之 而言之
躁謂 言及之 不言 隱謂 未顔色 見而言
ふ 之 瞽謂
これをこといふ」

一六―7
孔子ノ曰
「君子 三戒
少之時 血気未定 戒之色
在 其壮 戒之 戒之 得在
にあり そのさかんなるにをよんては けつきまさにこはし いましむること とうにあり そのおひぬるに
をよんては 也 血気既衰 戒之 戒之 得在
けつきすてにおとろへぬ いましむること うるにあり」

一六―8
孔子曰
「君子 三畏有 大人畏 聖人言畏
くんしは みつのおそりあり 天命をおそり 大しんをおそり せいしんのことをおそ
る 小人は 天命不知而 不畏也 大人狎 聖人侮
てんめいをしらすして おそりす 大しんになれたり せいしんのことをあなとる」

一六―9
孔子曰
「生而知之者 上也 学而知之者 次也 困而学之
うまれながらにして しるは かみなり まなんてしるは つきなり くるしんてまなふる

は　又(また)其次(ぎ)也　困而(で)不学(びざ)　民斯下為矣
　　そのつきなり　くるしんてまなひさる　たみこれをしもとす」

一六―10　孔子(こうしのたふまく)曰　「君子九思有視　みることはめいをおもふ　聴思聰　きくことはそうをおもふ　色思温(お)　いろはをんをおもふ　貌思恭　かたちはけうをおもふ　言思忠　ことはちうをおもふ　事思敬(ざ)　わさはけいをおもふ　疑思問　うたがはしきをはとはんとおもふ　忿思難　いかりにはなんとおもふ　得思義(ぎ)　うるをみては きをおもふ」

一六―11　孔子(こうし)曰(のたふまく)　「『せ(ぜ)ん善見をみては　不(ば)ぎ及をよはさるがことくにす　不(ぜ)ぜん善見ふせんをみては　湯探(ぐ)ゆをさくるがことくす(ご)』　吾(わ)れ　其(ひと)見矣　その人をみる　吾(われ)其語聞　そのことをきけり　隠居　いんきよして　以其志(ざ)求　もつてそのこゝさしをもとむ　義(ぎ)行　きをおこなつて　以其道達　もつてそのみちをたつす　吾(われ)其語聞矣　そのことをきけり　未(だ)其(ひと)見(ず)也　いまたその人をみす」

一六―12　「斉景公　せいのけいこう　馬千駟有　うませんしあり　死之(し)民得而称　しぬる日に　たみえて　しようすることなし　無焉伯夷叔斉　はくい・しくせいは　首陽之下　しゆやうのもとに　餓(ゑ)うへたり　たみ　于今到　いまにいたるまてにしようす　称之(で)　それ　其斯謂与　これをいふか」

一六―13　陳亢(ちんかう)　伯魚(ぎ)問曰　はくきよにとつていはく　「子亦異(ぶ)聞有乎　「し　またいぶんありや」　対曰　こたへていはく　「未(だ)也　いまたし　むかし　ひとりたてりき　鯉趨而庭過(ぐ)　り　はしつて　にはをすく　曰　のたふまく　『詩学(び)　まなひたりや』　対曰　こたへてのたふまく　『詩不学(びず)　まなひすんは(ば)　以(もつて)言無(こと)也　ものいふ事なかれ』　鯉退(そ)而詩学(ぶ)　り　しりそく　し　まなふ　他(じ)日独(また)立　たしつに　又ひとりたてりき

鯉趨而庭過　り わしってにはをすぐ　のたふまく　『礼学乎　なひすんは　以　たてる事なかれ』　鯉退而　りそひて　礼学斯　れいまなふ　斯二　このふたつをきゝき」　陳亢　ちむかう　退し

学無也　『れいまなひたりや』　対曰　こたへていはく　『未　いまたし』　『礼　れい　不ま

りそひて　喜　よろこんていはく　「一問　いつをとつて　三得　さんをえつ　詩聞　しきゝき　礼聞　れいきゝき　又　また　君子之　くんしの

其子遠　そのこさくる事をきいつ」　聞也

一六—14　邦君之妻　はうくんのめを　君称之　きみしようしては　夫人　ふしん　曰　といふ　夫人　ふしん　自称　ししようしては　小童　せうとう　曰　といふ　邦　くに

人称之　たみ　しようしては　君夫人　くんふしん　曰　といふ　異邦称諸　いはうにしようしては　寡小君　くわせうくん　曰　といふ　異邦称　いはうの人しよ

之　うしては　亦君夫人　又　くんふしん　曰　といふ

陽貨　第十七　やうくわ　ていしうしつ

一七—1　陽貨　やうくわ　孔子見欲　こうしをみまくほつす　孔子不見　こうしまみえず　孔子豚　こうしにいのこををくれり　孔子其亡也時　こうしそのなきをみて　而往　ゆいて

拝之遇諸　はいす　塗　みちにあへり　孔子謂　こうしにいつていはく　曰　「来　きたれ　予　われ　爾　なんぢ　与言　なんちといはん」　曰　いはく　「其宝　そのたからを

懐而　其　邦　迷　仁　謂可乎　曰
いたいて　そのくにをまとはすをは　しんといふへしや」　のたふまく　「不可
好　而　亟　時　失　智　謂可乎　不可　事　従　歳　日
とをこのんて　しは〳〵ときをうしなふをは　ちといふへしや」　曰　「ふかなり」　「ことにしたがふこ　「しつけつ月逝矣　いんぬと

我　与
われとゝもならす」　孔子　曰　「たく　諾　吾　将　仕　矣
し　われ　まさにつかへんとす」

一七―2
子曰　「性　相近也　習　遠也
あひちかし　ならふときんは　あひさる」

一七―3
子曰　「唯上智下愚与　不移武
しやうちとかくとは　うつらす」

一七―4
子　武城之　弦歌之声　聞　夫子　莞爾而　笑　曰
ふせいにゆいて　けんかのこゑをきく　ふうし　くわんしとして　わらつてのたふまく　「雞
割　焉　牛　刀　用　子游対　曰
さくに　いつくんそ　うしのかたなをもちゐん」　しゆうこたへてのたふまく　「昔者偃也聞夫子
諸　曰　君子道学　小人道学
ゝき　いはく　『くんし　みちをまなひつるときんは　すなはち人をあひす　せうしん　みちをまなひつると
きんは　則　使　易　子曰　「二三子　偃之言　是也　前言　戲之
すなはち　つかひやすし』」　ゐむがことはしなり　さきのことは　たはむれら
耳
くのみ」

一七―5
公山不擾　費　以　畔　召　子路　不悦　曰
こうさんふせう　ひをもつてそむく　しをよふ　ゆかんとす　しろ　よろこひすしていはく　「之　末
也　已　何必　公山氏之　之也　夫　我　召
くんは　やんなん　なんそかならすしも　こうさんしのもとにしもゆかん」　子曰　「それ　われをよふ

人にして　あにむなしからんや　如　我　用　者　有　吾　其　東　周　為　乎
もし　われをもちゆることあらは　われそれとうしうをせんか」

一七―6　子張しちやう　仁しんを孔子にとふ　問　孔子こたへてのたふまく　曰　「よく　能　五　者　いつゝものを　天下におこなふをしんと　行　為　仁　矣す」　請　問　こひとふ　曰　のたふまく　「恭　寛　信　敏　恵　けう・くわん・しん・ひん・けい　恭　けうなるときんは　則　すなはちあなとらす　不　侮　寛　くわんなるときんは　則　すなはちしうをう　衆　得　信　しんなるときんは　則　すなはち人にしんせらる　任　焉　敏　ひんなるときんは　則　すなはちこうあり　功　有　恵　けいあるときんは　則　すなはちもつて人をつかふにたる　以　使　足」

一七―7　仏肸ひつきつ　子召しをよふ　往ゆかんとす　欲　子路しろかいはく　「むかし　昔　者　ゆう　由　夫　子　聞　諸　ふうしにきき　也　曰　のたふまく　「親
其　身　於　不　善　為　者　君　子　不　入　也
つからそのみにおゐて　ふせんをするには　くんしはいらす」